
『ただいま』

快ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ただいま』

【Nコード】

N0161A

【作者名】

快ちゃん

【あらすじ】

新一×志保です。解毒剤で元の姿に戻った二人の話です。何も言いません…よろしくお願いしますm(_____)m

第1話：完成（前書き）

新一×志保の小説です。ラブラブなシーンはありません。いたって普通…です。『新一×蘭』派にはお勧めできません。初めてですの
で怒らずにご鑑賞下さいませ。

第1話：完成

「解毒剤出来たわ。120%完璧よ。遅くなってごめんなさい。」

哀はそう言つと再びコーヒーを口にした。

『えっ?!』

コナンと博士は同時に哀を見た。

その日、コナンは変声期の修理の為に阿笠邸に居た。

ソファーに座りながら雑誌をぺらぺらめくっていたコナンは

珈琲でも飲もうとキッチンへ向かおうとした。

その時、いつもの白衣をまとった哀が地下室から上がってきた。

「あら、工藤君。いらっしゃい。来てたのね」一瞬コナンに目を向けてソファーへ座った。

「ああ、灰原も珈琲飲むか？」哀に問い掛けると「お願いするわ」

とテーブルの上にあった雑誌を手に取りペラペラめくりだした。

ふう〜と深い溜め息をついた哀を博士は心配そうに

「哀くん。そんなに根を詰めると体に良くないぞ。あれ以来、地下室に閉じこもってるじゃないか。」

『…あれ以来…』

3ヶ月前、黒の組織は壊滅した。

コナン、哀、博士、西の名探偵である服部、優作、有希子、FBIの協力の元で…。

ジンは追い詰められて…自害。ウオッカ、ベルモットはFBIに引き渡された。

コナンと哀は負傷しながらも組織から薬のデータを手に入れることが出来た。

…それから哀は地下室でAPT-X4869の解毒剤の研究に入った。学校を何日も休むようになり研究室からもあまり出なかった。

「そうだぞ、灰原。あんまり無理して体でも壊したらどうすんだ？データは手に入ったんだし時間をかければいつか必ず解毒剤は出来るって。」

コナンは珈琲を灰原、博士の前において哀の向かいのソファに座り珈琲を一口飲んだ。

哀はカップに手を伸ばし、珈琲を一口飲むとテーブルにカップを置き、その横にカプセルが2個入った小瓶を置いた。

「解毒剤出来たわ。120%完璧よ。もう二度と幼児化することもないでしょうね。遅くなつてごめんなさい。」

哀は平静にそう言うと再び珈琲を口にした。

『えっ?!』

コナンと博士は同時に目を見合わせそして哀を見た。

「あら？嬉しくないの？今回は完璧よ。」と、クスクス笑った。

「ま…まじで？い、いや嬉しくないわけねーよ。ただ、急だからビツクリして…。」

コナンは目を丸くさせて答えていた。

博士も我に返り

「哀くん!!!よく頑張ったな。こりゃ、お祝いをせにゃならんなあゝ」と哀の肩に手を置いた。

「博士。喜んでくれるのは嬉しいけど、まだ検査をしたいの。もちろん解毒剤は完璧…。」

でも、やっぱりもとの体に戻った後の検査をしたいの。データが欲しいのよ。」

哀はいつもの冷静な声、表情で話し続けた。

「工藤君。元に戻ってから1ヶ月は検査を受けて欲しいの。その間はまだ彼女にも会わないで欲しいの。」

何かあつて、また彼女の前から姿を消したくはないでしょ?」

「分かった。検査は受けるし蘭にも会わないよ。灰原。ありがとな。」

黙って姿を消すつもりだったが、探偵団の気持ちを考えちゃんとお別れをいうことにして阿笠邸でパーティーが行われた。

「コナンくん。本当に?本当に行っちゃうの?!歩美、寂しいよ!!嫌だよー!!!」

歩美はもちろん号泣であつた。

「コナン、外国行ったらおいしい物いっぱい食べれるんだな?うな重はあるのか?」

「元太君。うな重はないと思いますよ。それに食べるために行くんじゃないくて、」

家族と一緒に住むためですよ!…でもそうになると…少年探偵団はどうなるんでしょうか?」

最後まで相変わらずのメンバーにコナンは「元気でな」の一言だけ

だった。

「あんまり気もたせたこと言うてあいつら期待しちまうからな。」
と少し寂しそうに微笑んだ。

蘭には本当の事は言わずに有希子に『江戸川 文代』に変装しても
らい探偵事務所に迎えに来てもらった。

「コナン君。元気でね。とっても楽しかったよ。」

蘭は寂しい気持ちをこらえて懸命に笑顔を作っていた。

第1話：完成（後書き）

本当に申し訳ありません。皆様のお怒りが目に浮かびます。
中々上手く表現できずに四苦八苦しています。にも拘らず連載を執筆中です。次回も期待せずにお待ち下さい。

第2話：復活 壱（前書き）

新ちゃんの復活編？です

第2話：復活 壺

その一週間後にコナンは『工藤新一』へと戻った。

工藤新一への姿に戻ってちょうど一ヶ月が過ぎた。

阿笠邸で新一は一ヶ月の検査を終了させていた。

「はい。工藤君、お疲れ様。今日で検査は終わりよ。検査結果は1週間ほどかかるけど、

問題は無いと思うわ。」

「ああ、色々迷惑かけたな。さんきゅ。灰原!!」

新一はシャツのボタンをとめながら検査器具を片付けている哀を見ながら言葉を続けた。

「灰原はいつ戻るんだ?」

哀は一瞬手を止めたが何も無かったようにまた片付けをしながら「わからないわ。」と答えた。

新一は黙ってその行動を眺め、片づけが終わった哀に「…分からないって?どういう事だ?」

と聞くと哀は新一を見てもう一度「わからないわ。」とクスツと笑った。

「はあ？何が分からないんだ？って聞いてんのに答えが「わからない」って

意味わかんねえーよ！！」

「貴方は、如何してもとの体に戻ったの？」哀は新一を見据えた。

その瞳は真剣で新一は一瞬息を呑んだ。

「貴方は、如何してもとの体に戻ったの？」哀は新一に同じ質問を繰り返した。

「そ、そりゃあ、元の体のほうがいいし、蘭にも待ってる！って言うてたし…。だ、だから。」

新一はしどろもどろになりながらそう答えた。

「そうよね。貴方には、元に戻らなくてはいけない理由がある。貴方の帰りをたくさんの方が

待っているわ。

それが一番の理由よね？…そして私のやるべき事は『貴方を元に戻す解毒剤を作る事』

だったわ。『灰原哀』の今、解毒剤は完成して貴方を元に戻す事が出来た…」

「灰原？」

「私はもう、やるべき事を終えたの。罪を償う事を除いては…ね。」

「もう、お前は十分苦しんだろ？それでいいじゃねーか。もう誰もお前を責めたりしねえーっ

て！」

「そうかしら？そんな事貴方に言われるなんて思いもしなかったわ。貴方が一番そう思ってると思う

てたから」

「ほんと、可愛くねえなあ」

「あら、ありがとう。褒めてくれて。」

「…褒めてねえって。で？どうすんだよ？」

「……………」

「戻ら…ないのか？解毒剤は2個あつただろ？なんっ…」

「…私は…どうして…いいか本当に…分からないの。」俯いた哀の表情は見えなかった。

（灰…原？泣いてる？）新一が哀の顔を覗き込もうとした。

哀は顔を上げていつものクールな表情で「貴方には関係ないことだわ。人の事を心配する暇が

あるなら早く彼女のところに行って喜ばせてあげたら?」

哀はそう言つと研究室から出て行つた。

(何だよ? 俺には関係ねえーって?) 新一は哀の言葉に苛立っていた。

(どうして、関係ないって言っちゃったんだろ?)

哀は自室に戻るとベットに腰を掛け最後の言葉を後悔していた。

仰向けに寝転がり天井を見ながら

「私は宮野志保に戻って何がある? 誰かが待っていてくれる? 灰原哀のままいたら何がある?」

哀はクスツと笑つて「私には誰も待ってくれてる人はいないわ。ここに理由さえ今の私には

ないわね。」と呟いた。

「出て行くつもりか?」 哀は上半身を起こして扉に目をやった。

いつの間にか新一が哀の部屋の扉にもたれて腕組みをして立っていた。

「なんの事?」 哀は新一の言葉に平静を装つて答えた。

「だから! 出て行くのか? って聞いてんだよ!!」 新一は苛立ちを

隠せずにいた。

「私が元に戻るとか戻らないとか、出て行くとか行かないとかは貴方には関係ないことでしょ？」

そう言うとベットから降りて新一の横を通り抜けようとした。

「ちょっと、待てって！！」新一が腕を掴んで哀が出て行くのをとめた。

「何？」哀はキツと新一を睨んだ。

「関係ねえーって何だよ？出て行ったりすんじゃないぞ。」新一は哀と同じ目の高さになるように

しゃがんだ。

「…博士だつて出て行つて欲しくないって思ってるよ。俺だつて…そうだ。」

…それに元の体に戻つて欲しいって思ってる人も…いるよ。」

新一は少し俯いて呟いた。

哀はその言葉にフツと笑い「あら？誰かいたかしら？」と首をかしげた。

「…明美さん。」新一の言葉に哀は息を呑んだ。

（お…お姉ちゃん？）

「明美さんは、おめえに組織を抜けて普通の生活をして欲しいって望んでいた。」

それを叶えてやらねえーと明美さん…悲しむよ。」

「灰原哀も宮野志保も同一人物だ。…でも灰原哀で居る事と宮野志保に戻る事は違うだろ？」

たしかに宮野志保に戻る事はお前にとつたら辛い事かもしれない。宮野志保でいた時は辛くて、

苦しくて思い出したくないかもしれない…だけど」

「…運命から…運命から逃げるなって言いたいんでしょ？」

新一は「ああ、おめえにはいつも同じ事しか言ってねえな。」と哀の掴んでいた腕を離し

自分の頭を抱えて溜め息をついた。

哀は「工藤君。ありがとう。関係無いなんて言っでごめんなさい。でも、もう少し考えさせてくれ

る？逃げたりなんかしないから。」

と笑った。

新一は顔をあげ「わかった。」と言って部屋を出て行った。

新一が地下室から上がってくると博士はウロウロと歩き回っていた。そして新一の姿を見ると「し、新一。哀君は？」と新一の両肩に手を置いて

「哀君は出て行ってしまっくんじやろうか？」と不安を隠せずにいた。

新一は「心配すんなって！灰原は出て行ったりしないから！（逃げないから…って言ってたしな）」

まっ、元に戻る戻らないはわかんねえーけどな。」

と博士の肩をポンポンと叩いた。

博士は新一の言葉に少しだけホッとしてソファーに身を沈めた。

新一は博士を見て（まるで父親だな）と微笑んだ。

哀は新一が出て行ってから再びベットに腰掛け考えていた。

（…お姉ちゃん。どうすればいい？…私、本当はここにいたいのに…
工藤君の側に…居たいの。）

でも、彼には行くべき所がある。見たくないの…一緒のところを…）

哀は新一が出て行ったドアを見てふっと笑った。

（逃げる事ばかり考えてるわね。…運命から逃げるな…か。）

哀はベットから立ち上がり新一や博士が待っているであろうリビング
グへと向かった。

第2話：復活 壱（後書き）

新ちゃんの復活で埋めたかったけど哀ちゃんの葛藤で終わってしまいました。次回は哀ちゃん復活か？な？

第3話：復活 式

地下室から上がってくると二人はソファーに無言で座っていた。

新一はいつもの癖である顎に手をかけていた。

博士は哀の姿を見つけるとパタパタと哀に近づき「あ、哀くん。その、なんじゃ…」

と言葉を詰ませた。

哀は「博士、心配かけさせちゃってごめんなさい。」とうつむき、そして…

私このままここにいてもいいかしら？と呟いた。

博士は目を輝かせ「勿論じゃとも！…ワシは哀君を本当の家族と思っておるよ！

だから出て行くなんてこと考えんでくれ！」

と哀の肩に手を置いた。

哀は少し涙目になって「ありがとう」と微笑んだ。

新一もその言葉にホッと息をついた。

哀はソファ―に座ると「…もう一つ…宮野志保に戻る事にしたわ。」と二人を交互に見た。

「じゃったら、善は急げじゃ!」まず転校手続きに…あつ服も買わんといかんのう。

ブツブツと独り言を言いい指を折りながらリビングを出て行った。

残された新一と哀はその後姿を見てふつと同時に笑った。「逃げるな!っていったからか?」

新一は哀にそういうと、

哀は「そうね。逃げてばかりじゃ…前に進めないもの」と笑った。

一週間後、コナンの時と同じく阿笠邸でお別れパーティーは開かれた。

「コナン君もいなくなっちゃったのに哀ちゃんまでなんて…。歩美の事忘れちゃったりしないでね?」

泣きじゃくる歩美の言葉に哀は

「江戸川君も貴方の事忘れていないわ。私も貴方の事絶対忘れたりはいしないわ。」

と優しく微笑んだ。

「手紙書くね。だから哀ちゃんも絶対にお返事ちょうだいね!」

「ちゃんと書くわ」という哀の言葉にやっと歩美の顔に笑顔が戻った。

哀は「貴方も書いてあげたら？」と新一を見上げて微笑んだ。

宮野志保に戻ったのはそれから3日後の事だった。

志保が苦痛の中、元の姿に戻り目を覚ました。

「哀……いや。志保君。気分はどうじゃ？」

志保はゆっくり上半身をベットから起こし「少し体が重いけど大丈夫よ」

と自分の手を見つめながらそう答えた。

「温かいミルクでも持ってくるから、ちょっと待っていてくれ」

博士はそう言つと部屋から出ていった。

そして心配そうな声がもう一つ。

「大丈夫か？灰原？」声のするほうに目を向けると新一が壁にもたれてこちらを

心配そうな表情で見ていた。

「ええ、大丈夫よ。以前戻った時よりは解毒剤が完璧な分、楽だったけどね…。」

「でもやっぱり辛いわね。」

「そうだな。俺も何回か元に戻ったけど今回はましだったよ。それにもう二度とこんな苦痛を

経験する事もないだろう?」

「そうね。そういえば…工藤君? 私はもう…灰原じゃないわ。」
「そう、

新一は「ああ、そうだったな。」といってベットの脇にある椅子に腰掛けた。

「…初めまして。か?」

「杯戸シティホテルで会ってるわよ?」志保は目を伏せクスツと笑った。

「ばあーろ。あん時はそれどころじゃなかっただろ? まともに見てねーよ。」

それにしても…お前本当に…18歳だったんだな?」

新一が意地悪そうに笑うと志保は

「あら? 貴方とお似合いっていったでしょ?」と笑った。

「灰原。」「…灰原じゃないわよ。」と溜め息をついた。

「あっ！…そうか。…じゃあ『志保』だな。」

「えっ？…な、なんで名前なのよ？」志保は『宮野』と呼ばれると思っていたので

驚いて新一を見た。

新一は「何でって？志保のほうが呼びやすいし。蘭や園子も名前と呼んでるぞ？」

とさりと答えた。

志保は（…相変わらず女心がわからない人ね）と心の中で溜め息をついた。

「嫌なのか？」新一がそう尋ねると志保は「好きにすれば？」と顔を少し赤らめた。

「じゃあ好きに呼ぶよ。？どうした？志保？顔赤いぞ？辛いのか？」

志保は「そんなことないわよ！…」というと布団を頭までかぶった。

「そうかあ？じゃあ、またな。ゆっくり休めよ」志保の行動に新一は首をひねって部屋を出た。

（…『志保』そう呼ばれるなんて思ってもいなかった。まあ…あの人はそんな深くは

考えてないみたいだけど。…それだけの事でも…こんなに嬉しいなんて…。

私も平和になったものね。だんだん普通になっていく…。灰原でいる時から徐々に

気配を感じなくなってきた…。。

『良かったじゃねーか！』…あの言葉に救われた。工藤君の一言はいつも力になる。

私にとって…貴方は…)

「志保君？」

「！」

「どうしたんじゃ？頭まで布団かぶって？ん？顔が赤いぞ？辛いのか？」

博士はキッチンからミルクを持ってきてくれたところだった。

「あつ…別に…これはなんでもないの。大丈夫だから」志保は慌てて布団から顔を出した。

博士の頭にはきつと???マークがいつぱい飛んでいただろう。

第4話：思案

志保が元の体に戻って数日後のある日

「えっ？博士、今なんて？」

志保は向かいに座って夕食を食べている博士に問い返した。

「じゃから、明日から志保君も新一と同じ高校に通うように手配した…と言ったんじゃないよ？」

博士は箸を置いて地下室へ降りていき、パタパタとまたキッチンへと戻ってきた。

その手には新一と同じ高校の制服が…。

「この通り！！ちゃんとう意も完璧じゃ！」博士は嬉しそうに制服を見せた。

「どうして工藤君と同じ高校なの？…それに年も違うし…工藤君は3年でしょう？」

そうなると私は大学に入るんじゃない？」

「俺と一緒に嫌なのかよ？」夕食を共にしていた新一がジト目で志保を見た。

「…志保君は向こうでは研究、研究で高校生活というものを送ってはいなかったじゃろ？」

志保君には一度普通の高校生活を送ってもらいたくて…じゃな。

そうなるとやっぱり新一がいたほうが何かと安心かと思つての。やつぱり…駄目じゃったか？」

（工藤君と同じ高校に通うって事は…彼女もいる…。）

「博士なりに志保の事考えてんだから…な？志保？」

志保はしょげている博士に「分かったわ。博士。心配してくれてありがとう。高校…行くわ。」

と軽く溜め息をついて微笑んだ。

夕食がおわり片づけを終えた志保がリビングに戻るとソファーに寝転んで推理小説を

読んでいる新一の姿しかなかった。

「博士は？」志保は新一の向かいのソファーに座ると雑誌をめくった。

「寝ちまつた。」

「貴方は帰らないの？」

「ん？ああ、これ読んだら帰るよ。」

「自分の家でも小説は読めるでしょ？何でここで読んでるの？」

「ここに居たほうが落ち着くからさ。邪魔なら帰るよ。」

「まあ、いいわ。珈琲入れてくるから。」志保はキッチンへと向かった。

（まさか、博士が寝ちまって志保一人にするのは危ないから…なんていえねーよなあ。

もし言っただとしても『結構よ』…とかって言われそうだしな）

新一は志保の言いそうな言葉を想像して心の中で苦笑いした。

珈琲を入れて新一の分をテーブルに置いた。

私は研究室で調べものがあるから。そう言ってリビングから出て行った。

（あいつ、戻ってこねえなあ？）

一時間ほどたった頃、新一は残りの冷めた珈琲を飲み込み志保の居る地下へと降りていった。

研究室のドアをノックして「志保？」と呼びかけた。

中からは何の反応もなく新一はドアを開けた。

パソコンの電源は入っているが放置していた為に画面は黒くなっていた。

志保はパソコンを前に腕を枕にして寝ていた。

「志保！風邪ひくつて！おい。志保？」

新一の呼び掛けにも志保は起きなかった。

（まったく！また寝てねーんじゃねーのか？博士が心配するわけだな。こんなんで大学なんて

行ったらこいつの事だまた研究に没頭すると思うし）新一は深く溜め息をつき

志保の寝顔を見つめた。

（こいつ、綺麗だよなあ？母親が確か…イギリス人…だったっけ？）

「…ん。…おね…ちゃん。…い…ないで。」

「え？」

新一は志保の顔を覗き込んだ。

志保の目から一筋の涙が頬をつたった。

（明美さんの夢…か？）

『どうして…？』『どうしてお姉ちゃんを…助けられなかったの

？』

はじめて志保に会った後に起こった殺人現場であいつに言われたな…。

新一は奥歯をかみ締めた。

(…ごめん。ごめんな、志保。)

新一はその涙を人差し指でそっと拭った。

(やっぱりまだ辛いんだな。忘れる事なんて…出来ないよな？)

「志保？」新一はもう一度志保に呼びかけたが返事はなかった。

「しょーがねーなー」新一は志保を起こさないようにそっと抱きかえた。

(う…わ…軽い。何食ってこんなに軽いんだ？人にちゃんと飯食えて言つといてこいつこそ

ちゃんと食ってんのかよ？)

新一はそう思いながら志保の寝室へと向かった。

博士が志保に戻る前に用意した部屋だ。女の子の部屋とは思えないほどシンプルだ。

志保らしい。余分なものは一切ない。

…1つだけ。机の上に歩美ちゃんと一緒に買ったお揃いのキティちゃんのぬいぐるみ。

志保をベットに降ろすとベットの端に座って志保を眺めた。

黒のタイトスカートに黒の半袖ニット。先程まで着ていた白衣は研究室に置いてあった。

（ここまできてまだ黒ずくめかよ）新一は苦笑いをした。

半袖の腕からすらっと伸びた白い肌。

（いつも研究とかばっかで地下に籠ってから日焼けもしねえよな）

新一がふと顔を上げると左の二の腕付近に傷跡を見つけた。

（…これって、杯戸シティホテルん時の傷か？やっぱり残っちゃったか。

俺があの時灰原を止めていればこんな傷も残させる事はなかったのにな…。

いつも『守ってやつから心配すんな』っていつてきてたよな？それなのにこんな

傷跡残させちゃった。確か、肩、腿、顔にも…顔は残ってねえな。）

「…ゴメンな。」

「…ん？」新一が志保に触れた時志保は目を覚ました。

新一は慌てて手をどかしてベットから立ち上がった。

「…く…どくん？」まだ寝ぼけているようで志保が呟いた。

「志保？起こしちまった？あんなところで寝るなよな？風邪ひくぞ？」

新一がそばにあった椅子に腰掛けてそう答えると志保は勢いよく起き上がりあたりを見渡した。

「研究室で寝てたんだよ。風邪ひくと思って俺が運んだんだ。」

志保は自分の胸元を掴んで顔を赤らめた。

「なっ、何もしてねーぞ？お、俺は運んだだけだからな？」

そう言つと「そんな事で慌てるなんて探偵失格ね？」とクスツと笑つた。

「…そういやー。さっきオメエ泣いてたんだけど…それって…明美さんの…夢か？」

志保の頬に涙が伝つた跡を見て新一は目を細めた。

「え？」志保は自分の頬を触り涙が出ていた事を知つた。

「…そうよ。この姿に戻つてからは毎日のように見るようになったわ。」

きつとこの体が…意識がお姉ちゃんにより近いから…と思うケド。」

志保は自分の体をぎゅっと抱きしめた。

「後悔してるか？」

「？…何の事を？」

「元の体に…戻った事をだよ。」

「…そうね。灰原のままでいればよかったのかも。」

「…志保」

「でも、それでは、何も終わらないし…何も始まらないわ。…だつて…逃げたくないから」

「そう…か。（お前はまだ運命に立ち向かってんだ。）」

新一は椅子から立ち上がると

「何かあったら俺に言えよ？一人で抱え込んだりするんじゃないぞ？お前は一人じゃねーんだから。」

じゃー俺は帰るからオメエーも寝ろよ？明日から学校行くんだろ？」

そう言つと志保の部屋から出ていった。

その後姿を志保は見送り

志保は膝を抱えて「灰原のままだったら忘れる事が出来たのかしら？」と呟いた。

志保は寝室からリビングへと上がり窓際に立ち外を見た。

リビングもキッチンも新一が帰るときに消してくれたのだろう。

隣の家を見ると2階の新一の寝室は明かりがついていた。

志保はその明かりが見える位置のソファ―に身を沈めその光が消えるまで眺めていた。

新一は志保の部屋からリビングへと上がりキッチン、リビングの電気を消して玄関のカギを掛け

隣の自分の家へと戻った。

2階の自室へ戻り電気をつけてベッドに寝転んだ。

天井を見上げ蘭の言葉を思い出していた。

新一が元の体に戻り蘭に会いに行った時

『もう何処にも行かないよね？私の側から離れないで！ずっと待ってたんだから！』

新一は「ゴメンな心配かけて。ほんとゴメン。」と謝った。

（何で何にも言えなかったんだろ？ずっと、蘭には言わなきゃならない言葉があった。）

コナンの頃は蘭の為にもとの姿に戻ってあの場所で…そう米花センタービルの展望レストランに

もう一度蘭を誘って…。蘭泣いてたよな？何処にも行かないでって言いながら俺の胸に顔うずめて…

だけど、抱きしめてやる事さえ出来なかった。何でだ？…何が違うんだ？）

時計の針は3時を回っていた。帰ってきたのは1時頃…。

新一は上半身を起こし窓を見た。

（『…ゴメンな。』あれは蘭に対しての言葉…思わず声に出ちまったけど。）

志保が起きる前でよかったぜ。）

（…志保は寝たかな？俺は、志保に何が出来るんだろ？毎日のように泣いているあいつに。

『にげるな』って言ったのは俺だ。俺があいつを苦しめてるんだろ
うか？）

新一に答えは出なかった。

ベットから降り、部屋の電気を消した。

寝るつもりでベットに入っただが寝る事が出来ずに窓際の椅子に座り外を眺めていた。

第4話：思案（後書き）

志「勝手に人の部屋にぬいぐるみ置かないで」

新「キテイちゃん？」

作「可愛いやん？何なら花柄の乙女チックな部屋にする？」

志「新作の薬飲ませるわよ？」

作「！！！！ごめんなさい」

第5話：転入生

新一は帝丹高校3年に進級していた。

工藤君なら一年弱休学していても問題は無い。…と言う学校側の配慮（と、いうより新一の名声が高いからだろう）で進級することが出来た。

3年の教室は2年の持ち上がりである。

「よう、工藤！復帰そうそう、夫婦で登校か？」

「工藤君。久しぶりー」

相変わらずのクラスメートだ。新一も「バー口。んーなんじゃねーよ。」

いつもの様に答えた。

新一が元に戻って1ヶ月後に新一は蘭に戻ってきた事を伝えた。

蘭は、ずっと新一の胸で泣き続けていた。

「新一。早くしないと学校遅れちゃうよー？」

蘭は、あのころと同じく新一を迎えに来ていた。

「ああ、わかってるって！うつせーなあ。」

蘭の待っていた門を開け道路に出た所で、ふっと阿笠郎を見た。

（あいつ、今日から学校だよな？もう行っちゃったのかな？）

新一が阿笠郎を見ていると、蘭が「新一？どうかした？博士に何か用事？」

と首をかしげて新一を覗きこんだ。

「ん？ああ、…別に」と言って学校への道を歩きはじめた。

「なんか、帰ってきてからの新一変だよ？何かあったの？」蘭が新一の隣でそう問い掛けると

「何もねーよ。かわんねーだろ？別に。」新一のそっけない返事に蘭は何もいえなかった。

（やっぱり変だよ。…だって、前はそんなじゃなかった。事件の事とかホームズの話とか

してくれてたのに帰ってきてからの新一は何も話してくれない。会わないと人って

変わっちゃうのかな？でも、待っていてくれて言われたし、戻ってきてすぐに

会いに来てくれたし。でも…でも…）蘭ははあ〜と溜め息をついた。

そんな蘭に新一は気付く事はなかった。

「工藤！！隣のクラスに転入生がくるってよ！」

「しかも、女で年は1つ上で帰国子女！」

「胸もでかいしめっちゃ美人だってよ！！！」

クラスメートが新一の周りに集まってきたり口々にその話題で持ちきりとなった。

新一は（…志保か。そういやあ、小学校の時もあいつ騒がれてたな）と心の中で苦笑いした。

「新一君！やっと帰ってきたんだねー。かなり長かったけど、そんなに難しい事件だったの？」

新一の前の蘭の席に遊びにきていた園子が新一に話し掛けた。

「あ？ああ、まあな。」

「新一君がいない時の私を見せたかったよ。この推理クイーン園子様の推理シヨーを！」

「……………何だよ、それ？（って…まだ言ってるのかこいつは…）」

新一は呆れて溜め息をついた。

昼休みになり「工藤！！転入生見にかねーか？」と誘われた。

「ああ？俺はいいよ。（あいつ、俺が行くと絶対嫌がりそうだしな…）」

新一はそう言うのと屋上への階段を上った。

「新一？どこ行くのー？もうすぐ授業始まっちゃうよ？」蘭が階段の下で新一に向かって

叫んだ。「屋上で寝るんだよ！昨日あんま寝てねーんだ。」先生には適当に

言っといてくれー。手をひらひらさせて新一は階段を昇っていった。後ろから蘭の怒った声が聞こえていた。

屋上に出ると、授業は始まっていた。

グラウンドからは生徒たちが体育の授業をしている。音楽室からは歌声も聞こえ始めていた。

新一は出入り口の上の給水タンクのあるはしごを上りごろんと寝転がり空を見つめた。

少しして屋上の扉が開く音が聞こえた。

新一は上半身を起こしその人影を見つけて目を丸くさせた。

肩より少し伸びた赤茶色の髪が風に揺れ少し緑がかった瞳は少し眩しそくに校庭を見つめていた。

屋上へとやってきたのは本日転入してクラス中で騒がれていた志保だった。

（???何やってんだ?あいつ。授業中だろ?って、俺も人の事はいえねえーな。）

そうふつと笑うとその気配に気付いたのか志保が振り向き新一の存在に気付いた。

志保は一瞬驚いた顔をみせたがすぐにいつもの顔に戻り

「あら、あら、名探偵さんがサボリ?」とくすくす笑った。

「オメエーはどうなんだよ?今日、転入してきたばかりでもうサボりか?」

と負けずに対抗した。

「うちのクラスは自習よ。質問攻めに会う前に逃げ出してきたのよ。」

「まあ、転入生でも珍しいのに帰国子女って肩書きだからなあ。しようがねーよ。」

でも、あんまつんけんしてると友達できねーぞ?」

「知らないわ」志保は再びフェンスの向こうの校庭に目を向けた。

（灰原ん時と同じじゃねーか）新一ははぁーと溜め息をつき空を見上げ、

視線を志保に戻して

「なあ、こっちこいよ。いい眺めだぞ。」そう言って手を差し伸べた。

志保は一瞬躊躇したがゆっくり新一への元に歩き出しその手をとった。

「制服似合うな？向こうには制服なんてなかったんだろ？」

「ええ、それに勉強と言うより…研究ばかりしていたから白衣姿がほとんどだったしね。」

「今だって家では白衣じゃねーか。たまには可愛い服でも着てみたらどうだ？」

「結構よ。どうせ似合わないし。」

「博士が嘆いてたぜ？買い物に行っても志保が自分の選ぶ服を買ってくれない！ってな。」

「って言うか博士はどんな服選んでるんだ？」

「……レースのたくさんついた服よ。」

「博士らしいな。」新一はくっくつと笑った。

「それにしてもここは風がよく通るわね。眺めもいいし。」

「だろ？給水タンクがあつてあんまり広くないからここはみんな知らないんだ。」

新一は寝転びながら志保に視線をうつしにかつと笑った。

確かに広くはない。2畳分…といったところだ。

少しでも動くと肌が触れ合うぐらいに。

（工藤君は何も感じてないでしょうね。私もこの気持ちを知られてはいけないし…

期待してもいけない。宮野志保に戻る決意をしたのは工藤君の側に居たいから。

でも決してこの気持ちを伝えない。貴方の人生を狂わせてしまった私は幸せには

なつてはいけないの。…お姉ちゃん。約束…守れなくて…ごめんね。）

「…志保？おーい。志保？」

新一は志保の顔を覗き込んでいた。

「……！な、なに？」志保は知らずに俯いていた顔をぱつと上げた。

「何考えてんだ？」新一が不思議そうな顔で見ていた。

「べ、別に、…なんでも…な」「い」と言おうとした時屋上のドアが勢いよく開いた。

「新一？」声の主は蘭だった。

新一はとっさに志保の口を手で抑えて志保の体を倒し自分の体の下に隠すように被さった。

「?!」新一は小声で「しーっ」と人差し指を自分の口にあてた。

「あれー？新一いないよぉ？おっかしいなぁ？屋上行ってくて言つたのに。」

「教室に戻ったんじゃないの？」後からついてきた園子がそう答えた。

「そうかなー？せっかく自習になったって教えにきたのに！」

園子はひじで蘭を突つつきながらにやけた顔で聞いた。

「ねえ！ねえ！蘭！！新一君とはどうなったの？」

「…どうなったって…何が？」

「惚けちゃってー！何か言われたの？蘭の気持ちは話したの？」

「っ…内諸だよー。」蘭は一瞬言葉を詰まらせたが明るく振舞い答えた。

「何よー！もったいぶってさー。教えなさいよー！！」

そんな会話を残して屋上のドアは閉められた。

はあー新一は大きく溜め息をついた。

志保は何が起こったかわからずに眼をぱちくりさせていた。

それに気付いた新一は「わりい」といって志保の口をふさいでいた手を外して体をどかした。

「何なの？どうして隠れる必要があるの？」志保は新一の行動に疑問をぶつけた。

「んー？わかんねえーけどとっさに隠れちゃった。」新一は自分でもよく分からなくて

首をかしげていた。

「…変な人」志保は溜め聞き混じりに呟いた。

「…変？俺ってなんか変わったか？」新一が志保を見た。

志保は「え？」と隣に座っている新一を見つめた。

新一と志保はしばらく見つめ合っていたが新一がふうと小さく溜め息をついて

「いや、なんでもねえ。」そう言つとその場所からトンツと下に飛び降りた。

「工藤君？」

新一を呼び止めると新一は

「オメエーも授業出るよー」と言っ て屋上をあとにした。

「…本当に…変な人」志保は寝転がり空を見上げた。

（工藤君。毛利さんに伝えたのかしら？…伝えたに決まってるわね…。その為に彼は元の姿に

戻ったんだから。…じゃあ、何で隠れる必要があるの？鈴木さんがいたから？

でもはじめは毛利さんの声しか聞こえなかったし…。照れてるのかしら？

…私には…関係ない！！…そうなるのは…わかっていた事だわ。）

志保は上半身を起こし少し悲しそうな笑みを浮かべた。

第6話：逢魔が時

(…はあ)

溜め息をついた志保は誰もいない放課後の教室で窓際の席で

グランドを眺めていた。

(やっぱり慣れないわね…いつまで続くんだろ?)

ーガラッー

教室のドアが開けられた。志保がゆっくりとその方向に眼を向けるとそこには

会った事もない男子が立っていた。

宮野さんへ

話があるので放課後

教室に来てください。

机の中にあつた手紙…名前も無かった。

「み、宮野さん。来てくれたんですね？」

「話って何かしら？」

「あ、あの。その。………僕と付き合ってくださいませんか！……！」

その男子生徒は顔を真っ赤にして俯いて叫んだ。

「ごめんなさい」

志保は一瞬の間もおかずに即答した。

「え？」

その速さに男子生徒も顔を上げ思わず聞き返した。

「ごめんなさいね？貴方とはお付き合いできないわ。」

「つ、付き合っている人いるんですか？」

「いないわよ」

「好きな人いるんですか？」

「…貴方に答える必要があるのかしら？でも、貴方に言っておいたら噂が広がってこんな事も

無くなんだったらいいかしら？」

「え？それはどういう…？」

「好きな人がいるの。ずっとずっと片思いしてるの。だから、ごめんなさいね。」

「そ…そうですか…。分かりました。お時間取らせてしまってますみませんでした。」

男子生徒は志保に小さく頭を下げると教室から出て行った。

はあー

志保は再びグラウンドに目を向けた。

「こんな女何処がいいのかしら？」

「頭もいいし、スポーツも出来る。綺麗な顔立ち、背も高い。そんな女滅多にいないじゃん？」

「！！く、工藤君？」

志保は先ほど男子生徒が出て行ったドアを見て目を丸くした。

「フツタのか？あいつ結構人気あるんだぜ？女子生徒のアイドル的存在なんだ。」

「そ、そんなの知らないし…興味ないわ。それより！貴方いつからそこにいたの？」

盗み聞きなんて趣味悪いわよ？名探偵さん！」

「えーっと、たしか…「僕と付き合ってくださいませんか…！！！！」」
位からかなあ？

盗み聞きするつもりは無かったんだよ。教室行く途中で、そんな言葉が聞こえたら誰だって

聞いちゃうだろ？それにその返事の声が志保だったからさー」

「そう」

（どうしよう…聞かれてたなんて…『好きな人がいるの。ずっとずっと片思いしてる』

名前なんて言わなかった…気付かないわよね？）

志保はそう答えて帰り支度をはじめた。

「断り方上手くなったよな？」

「え？」

「お前、転入してから今日までかなり告白されてただろ？初めの頃は…確か…」

『私の何が分かってるの？外見だけで好きとか付き合おうとか考えてる程度の低い人とは』

付き合うことなんて出来ないわ』とかいってたよな？」

「なっ、何で、知ってるのよ？」

「それ、言った奴サッカー部の奴でさあ、部室で聞いたんだよ。アイツ、涙目になってたぜ？」

「本当のことを言っただけだよ。本当の私を知ったら皆そんな事しないでしょ？」

冷やかな眼でクスツと笑った。

「ったく。恋愛つてもつと馬鹿になっていいんじゃないの？はじめは外見からで付き合ってから」

中身つて奴、いっぱいいると思うぜ？まあ、俺は違うけどな。」

「じゃあ…馬鹿な人が多いのね…私は馬鹿にはなれないわ」

「でも、好きな人がいるってだけじゃなくてずっとずっと片思いなんて言われたら」

しょうがないって思うからなあ。だから、上手くなったなっと思ってさ。」

「……………」

「もしかして、ほんとに片思いしてる奴いるのか？」

「そんな事貴方には関係ないでしょ？」

新一が顎に手をかけ言葉を続けた。

「まあ、関係ないっていえば関係ないけど…。そうか…いるん…」

「推理するのは事件だけにしておきなさいよ。人の詮索は悪趣味よ？」

そう言つと再び帰り支度をし始めた。

「別に詮索してるわけじゃねーけど。志保はそんな事興味ないって思ってたからな。」

志保は何も言わずに黙々と荷物をまとめた。

（本当にこの人は…自分のことに対しては鈍感って言うか…）

「…すげえな。」

いつの間にか窓際に立ち志保のとなりで新一が呟いた。

「え？」志保は思考を切断され、手を止め振り返った。

「夕日だよ。真っ赤」

（…哀しい色…すべてを血に染める…太陽の断末魔…）

「綺麗だよな？誰もが惹かれる…」

「『逢魔が時』…だから…惹かれるというより…惹き込まれるんじゃない？」

「そうか…そうだな。魔に逢う時間…陽^ひの束縛から解放された魑魅魍魎や禍が、

薄暗闇に溢れ出す時…そのとき誰かを惑わせる…」

「この陽を見て誰かが何処かで惑わされているのかしら？」

志保はクスツと笑うと再び帰りの支度をはじめた。

新一は夕日の光を浴びて綺麗に色付いている志保を見つめた。

（逢魔が時）

（惹き込まれるんじゃない？）

（誰かが何処かで惑わされているのかしら？）

「…ん。く…君。…く…工藤君！！」

「え？何？」

「何？じゃないわよ！何回も呼んだのよ？人の顔ジロジロ見て！何かついてるの？」

「いや。何にも…。で？何だった？」

「私、帰るから。夕飯はいつもの時間だから」

溜め息まじりにそういい残して志保は教室を出て行った。

新一は志保が出て行ったドアをしばらく眺めて再び真っ赤に染まった空を見つめた。

グラウンドに目を向けるとグラウンドの端を先程出て行った志保が歩いていた。

グラウンドで部活の片付けをしていた生徒達が志保を見つけて 4 / 5

人集まって何か話してる。

その一人が志保に向かって何かを言ってる。

志保はそのほうに顔を一瞬向けてすぐに顔をそらせた。

「…馬鹿な奴が多いんだよ。…逢魔が時…惑わせてんのはアイツだよな。」

「…志保に好きな奴？…誰だ？博士ってわけないしな…」

新一は顎に手をかけ考えたが…勿論答えは出なかった。

第6話：逢魔が時（後書き）

志「何で博士が出てくるのよ？どっいつ思考回路？」

新「やっぱり違うよな？」

志「違うわよ！！」

博「……………違うのか（；；）」

作「青春してるねえ。いいねえ」

志「くだらない事書かないでよ」

新「片思いの相手って誰？」

作「そのうち分かるって（^ ^）」

つて事ですので次回も宜しくお願いします。

新「……………誰だろ？」

志「しつこいわね！」

第7話：私：だけ？

ある日の放課後いつものように新一と蘭は一緒に下校していた。

「ねえ、そういえば隣のクラスの転入生、新一見た？」

新一は蘭の少し前を歩きながら蘭の問いに「ああ」とだけ答えた。

「もう、結構たつのにまだ男子にすごい人気なんだってー。私も園子と見に行っただけ」

「すごく綺麗な人だね？…でもね、隣のクラスの友達があんまり話さない人って言うてた。」

「いつも本ばかり読んでてねー」

新一は蘭の言葉を遮り立ち止まって振り返り「本読んできるとか人と話さないとか、そんな事、

個人の自由だろ？ずっと外国にいたんだし慣れるまでしょうがねーよ。」

オメーもいちいち見に行ったりすんじゃないよ。」

そう言うともたスタスタと歩きはじめた。

「新一？でもさー…」蘭が新一に話し掛けようとしたとき

前方に今まで話していた噂の転入生を見つけた。

（あつ、…えつと、確か…宮野し…）

「志保！！」

「えっ??」蘭は足をとめ驚いて新一を見上げた。

（シ…ホ?…しん…いち?知ってるの?な…んで?）

新一の声にその人は立ち止まりゆっくりと振り向いた。

「どこ行くんた?帰り道はそっちじゃないだろ?」

「工藤君。買い物に行つて来たんだけど買い忘れがあつたから…。
あと、本屋にも寄りたいから

博士には夕食は少し遅れるつて伝えてくれるかしら?工藤君もいつもの時間に来てはまだ

出来てないと思うわよ。」志保は買い物袋を見ながらそう微笑んだ。

「ああ、別にいいよ。小説でも読んでるよ。」

そう言うとき志保の手から買い物袋を取った。

「…小説?前に読んでいた本?あの日あれから遅くまで電気がついてた訳がわかつたわ。」

とクスツと笑った。

「?!お前、あの日あれから寝てねーのか?寝ろって言っただろ?」

志保は、新一の部屋をリビングからただ見ていた事を思い出し

「そ、その、たまたま水を飲みに行った時に見えたのよ!」と言葉を返した。

「ほんとか?博士も心配してんだから、ちゃんと寝ろよ?」新一がジト目で志保を見た。

その時

「新一?その人知ってるの?」

新一の後ろから顔だけ出し不安な…でも少しむっとした表情で新一を見た。

「宮野志保。博士の親戚だよ。今は博士の家に住んでんだ。」

新一は蘭を見ながらそう答えた。

「初めまして。宮野志保です。工藤君とは前に事件で知り合ったのよ。」

志保は蘭に微笑んだ。

「あつ、は、初めまして。毛利蘭です。…事件…で。そうだったんですか。」

宮：野さんって何処かで会ってませんか？」

「学校で会ったんじゃないかって？」

「あつ、そうじゃなくて…もつと前に…。」

「いいえ。気のせいじゃないかしら？」

「そ、そうですよね。」

「あー！……志保おねーさんだー！！」

元気に走ってきたのは例の3人組だった。

「あら、歩美ちゃん。こんにちは。」

「こんにちは。志保お姉さん！新一お兄さんも蘭お姉さんもこんにちは。」

「歩美ちゃん、学校の帰り？（歩美ちゃん達…も宮野さんの事知ってるんだ…）」

蘭が歩美の目線にしゃがんで話し掛けると

「うん！今からみんなで公園に遊びに行くの！ね？」

そう言って後ろを振り向くいつもの2人が元気に

「『はい！』『おう』」と返事をした。

「そっかー。でも、コナン君や哀ちゃんがいなくなって寂しくなっちゃったね?」

歩美は少し寂しそうな表情をした後ニツコリ笑って

「でも、大丈夫!だって哀ちゃんのお姉さんがいるもん!志保お姉さんがいるから

歩美大丈夫だもん!でも…やっぱり哀ちゃんいなくて寂しいけど…」

「えっ?」蘭は歩美の言葉に志保に眼を移した。

「コナンも灰原もひでえーよなあ。あれから全然連絡してこねえーじゃん。」

「しょうがないですよ。お二人とも外国なんですから。そう簡単に帰ったり出来ないでしょうし、

向こうにもお友達がいると思いますし。」

「…………哀ちゃん…歩美の事…………」

「『歩美』。』『歩美ちゃん』」

光彦と元太の心配そうな声に歩美はまたニツコリ笑って

「大丈夫だよ!だって光彦君も元太君もいるもん!」

その少年探偵団の3人を少し寂しそくに微笑んで志保と新一は見ていた。

「それじゃあ。またねー！」

3人は大きく手を振って公園へと走っていった。

「哀ちゃんのお姉さん？…でも、苗字が…。」

「哀とは姉妹だけど両親が離婚してるから苗字が違うのよ。」

志保は歩美たちの走っていった方を名残惜しそうに眺めながら答えた。

「…そうだったんですか？新一何にも話してくれないから…。」

蘭は新一を睨んだ。

「別に、わざわざ言う事もないだろ？じゃあ、俺ら行くから。志保も早く買い物済ませろよ？」

そう言う蘭の背中を帰り道方向へ押した。

「いつから宮野さんは博士のうちに住んでるの？博士も何も言ってくれないし！」

前の事件って新一がずっと帰って来なかった時の事？哀ちゃんにお姉さんが居た事なんて

…知らなかったよ？皆…歩美ちゃんでも知ってたん…」

志保と別れたあと蘭は新一を質問攻めに行っていた。

「あー！！もう！うつせーなあー。蘭には関係ないだろ？あいつの家は色々事情があつて

大変だったんだ。事件の事ももう終わったんだ。志保にも変なこと聞いたりすんじゃないぞ？」

新一は少し声を荒げて答えた。

「なによ。何も知らされてなかったんだから、しょうがないじゃない。私…だけ…知らなかった？」

…新一って…なんか変わっちゃったね？

前は何でも話してくれたじゃない？帰ってきてからの新一なんかおかしいよー！！

…それに…夕飯は何時も博士の家で食べてるの？私が作りに行ってもよかつたのに」

蘭も納得がいけない！！という感じで新一を見た。

「俺は何も変わってねーよ。それに飯は志保が二人も三人も変わらないからって言ってな。

俺も昔は作ってたけどやっぱり食わなかった日もあったし体壊すから食べに

来いって事になったんだよ。」

新一は振り向きもしないで答えた。

「…そう…なの」蘭は新一の後ろを俯きながら歩き続けた。

（やっぱり、変わっちゃったよ。新一。前は「関係ない」なんて言わなかったし…。

…私は待ってたんだよ？あの日コナン君に言われたから…。ずっと待ってたのに…

何にも言ってくれないんだね？どうして？）

色々考えていたらいつの間にか毛利探偵事務所の前に着いていた。

「じゃあな。蘭。また明日！」そう言って新一は片手を挙げた。

「あつ、新一！ちょっと寄っていかない？」蘭は新一を呼び止めたが

「わりい、博士にも飯が遅くなる事言わなきゃなんねーし、用事あったから。また今度な」

そう言つと走つて帰つていった。

（何よ！！私は新一のなんなのよ！）

蘭は行き場のない思いを心の中で溜めていた。

第7話：私…だけ？（後書き）

新「カレーか？」

元「おっ？うな重じゃねえのか？」

光「これは違うと思いますよ？」

歩「人参、玉葱、じゃが芋？カレーしかないよー!!」

蘭「家もカレーにしようかなあ。」

作「じゃあ、家も…。」

志「勝手に他人の家の買い物袋見ないでくれる？」

新「カレーかあ」

志「……肉じゃがよ。」

一同「えっ？？人参も？？」

次回はかなり頑張って書きましたのでお楽しみに（^ ^）

第8話：Party（前書き）

新一に何も聞かされていなかった蘭…。
どうして新一は蘭に何も話さなかったのか？

第8話：Party

「ねえ、新一君の復帰お祝いパーティーしない？？」

ある日の放課後、新一と蘭、園子の3人での下校途中で園子がそう切り出した。

「はあ？」新一と蘭は同時に口にした。

「いーじゃない。土曜日の夜にやれば、和葉ちゃんや服部君も呼べるし？」

例の少年探偵団のガキンちょ達も呼んでもいいし。」

「でもさー、園子ー。新一が帰ってきてもう結構たってるよ？」

『復帰』って…。」

「いーじゃない。楽しけりゃ」

新一たちの有無を言わずパーティー計画は進んでいた。

くある土曜日の夕方

鈴木邸ではパーティーが行われていた。

新一はグレーのスーツにネクタイなし。いつもと同じ…格好で鈴木邸に入ってきた。

その後ろからはピンクのキャミワンピのロングドレスにシヨールを羽織った志保の姿が。

「お姉ーさーん！志保お姉さーん！」志保の姿を見つけて真っ先に駆け寄ってきたのは

赤のドレスに赤のカチューシャ姿の歩美だった。

「志保お姉さん。こんばんは。とってもキレー」

「こんばんは。歩美ちゃん。歩美ちゃんもとっても可愛いわよ。」

志保は歩美の目線に合わせて、そう言うにつこり微笑んだ。

「えへへへ」歩美は大好きな志保に褒められて頬を赤く染めた。

「新一お兄さんもこんばんは。」隣にいる新一に気付くと丁寧にお辞儀をした。

「こんばんは。歩美ちゃん。」新一もにつこり微笑んだ。

「元太君に光彦君もこんばんは。」

歩美の後ろからいつものようにってくる2人にも志保は声を掛けた。

「こんばんは。」光彦は丁寧にお辞儀をした。

「こんばんは。なあなあ、ここの料理食べ放題だってよ。うな重は無かったけどな。」

早く食わねーと姉ちゃん達の分なくなるぜ?」

「もー、元太君はそればかりですね?」

「いいじゃねーか。おい、光彦!今度はあっちのテーブルに行ってみようぜ?」

元太は挨拶もそこそこに料理のいっぱいのっているテーブルに駆け出した。

「あつ、待つてください!」光彦もそれに続いた。

残された歩美は志保の顔を見ると少し小声で

「志保お姉さん。…その…あのね…。あ、哀…ちゃんは、元気かな?志保お姉さんは、

哀ちゃんと連絡してる?歩美ね、哀ちゃんにいっぱいお手紙書いたの!だから…だからね。」

「哀は元気してるわよ。歩美ちゃんの手紙、哀に送ってあげるわ」

「本当?ありがとう、志保おねえさん!」

「あの子、あまりそういうことしないから。…ごめんなさいね。歩美ちゃん。」

ちゃんと返事も書くように言っておくから。」少し目を細めて寂しそうに答えた。

「うん。じゃあ、今度持っていくから！絶対に絶対だよ！」

歩美は嬉しそうに元太たちの元に走っていった。

志保は小さく溜め息をつき「あの子達は傷つけないわね」と哀しい笑顔をつくった。

新一は志保の肩をポンッと叩くと優しく笑いかけた。

志保はいつもの表情に戻すと「貴方にはないみたいね？忘れられちゃったんじゃない？」

と意地悪そうに口元を引き上げた。

新一がジト目で志保を見た…

「よお。工藤！！」

「服部！！オメエも暇だな？こんな所までワザワザ来るなんて」

「しゃーないやろ？和葉が『行きたい！！蘭ちゃんに会いたい』ってゆーんやから。」

俺は別に来とーなかったんや。」

新一と平次の会話に後ろにいた志保がくすくすと笑った。

「貴方たち、本当に仲がいいのね？」

「おっ？もしかして…灰原の…ねーちゃんなんか？」平次はその相手を凝視した。

「ええ、この姿で会うのは、初めてね。」

「なんや、えらいべっぴんやなあ？ホンマ18歳やったんやな？工藤から戻ったとは聞いたけど」

「あら？ありがとう。お世辞がうまいのね？」志保が笑うと平次は

「まあ、なんにせよ、元に戻って丸く収まったわけやし？灰…やのーて宮野のねーちゃんも

お疲れさん！ちゅうことで…今度デートしよか？俺が大阪、案内したるでー？

大阪にはな、ぎょーさんいいところあるさかいに」

「ちよつと、待て！何でお前が志保とデートなんだ？お前には和葉ちゃんがいるだろ？」

新一がジト目で睨んだ。

「なんや？和葉は別に何でもないやろ？そないゆうなら、お前もまた案内したるか？

まだまだ、大阪にはいいところあるでー？」

「ああ？遠慮するぜ。また、パトカーで案内させられそうだしな」

「なんやとー？あの車は新品やってんで？」

志保は二人の会話に呆れて一人パーティー会場の中に消えていった。

「新一！！遅かったじゃない？もうパーティー始まってるよ？」

蘭が新一の姿を見つけ近づきながら話し掛けた。

「ああ、志保が準備に手間取ってな。」新一がそう答えると

「そ、そう」蘭は少し俯いて答えた。

（…一緒に来たんだ。そうだね？お隣だもんね。…宮…野さん、綺麗な人）

蘭はさらに不安が大きくなった。

（もしかして…新一って…）そう思って蘭は大きく頭を振った。

「蘭？どうかしたか？」新一の問いに「えっ？…ううん！なんでもないよ。」

そう答えるのが精一杯だった。

「工藤君！！やっと帰ってきてくれたか！！これからも君には期待しとるぞー！！」

そう言つて新一の背中を叩いたのは…目暮警部。

「目暮警部殿！この私、名探偵毛利小五郎もお忘れなく！！」

パーティー会場はいつもの顔ぶれが揃っていた。

目暮警部、佐藤、高木、白鳥、千葉刑事まで…。

（おいおい、どうなつてんだよ？警視庁捜査一課はそこまで暇なのか？）新一は苦笑いしていた。

おっちゃんが来てるってことは…妃さんもいるんだよね？

妃さんの姿を見つけて新一は目を丸くした。

その隣には新一の両親が立っている。

「いつ、帰ってきたんだよ？息子にも連絡なしかよ？」

「あら、新ちゃん！！元気してた？さっきロスから戻ってきたのよ。

で、英理ちゃんに電話もらつて来たってワケ、たまたま帰ってきたらパーティーだなんて

運がいいわね？ね？優作！！」

「そうだな。新一も元気そうで良かったよ。」

「ああ、お陰様でね。で？いつまでいるんだ？」

「2、3日はいるつもりだよ。日本の出版社との打ち合わせがあったからね。」

ああ、あともうすぐ闇の男爵の新刊が出るからまた送っておくから」

「マジ?。」

「ちょっとー、そんな話よりー新ちゃん!!どうなのよ?。」

「あ?何が?。」

有希子が新一に耳打ちするように小声になる。

「蘭ちゃんよ!ら・ん・ちゃん!戻ってきた時に言ったんでしょ?。」

「何にも言ってねーけど?。」

「えー?どーしてえー?。」

「別に、蘭とはどうもなってるねーから!。」

そう言って新一はパーティー会場の人込みに入っっていった。

「どーして?ねえ、優作-。」

優作は新一の後姿を新一と同様あごに手をかけ目を細めた。

「志保君。こんばんは。あまり楽しそうじゃないね?。」

志保は窓際に1人佇み外をみていた時、後ろから声を掛けられた。

「こんばんは。いつ此方へ？」

「夕方にね。日本で打ち合わせがあつたんだよ。」

「そうですか。…あの、私…何て言っていいいか…あの時は本当に世話になりました。」

「いやいや。皆無事に戻って来れたんだ。君も辛かつただろう。」

「いえ、私なんか。こうして生きていられるのも皆さんのお陰です。」

「それに、君には感謝しているんだ。」

「えっ？」

「新一を元の姿に戻してくれただろ？有希子も本当に喜んでたよ。ありがとう。」

「そ、そんな、感謝だなんて…元はといえば私の所為でこんな事になつてしまつて…」

恨まれるのが本当なのに……」

「もう、そんな事気にしなくてもいいんだよ。君の罪はもう消えたんだから。」

何も気にせずに君は君の幸せを見つけていくといい。それが私達の

希望でもあるからね。」

「幸せ？」

「そうだよ。有希子も私も、それに新一もきつとそれを望んでいるはずだから。」

「工藤君にも言われました。『誰も責めたりしない』って…。でも工藤君だけじゃない…」

有希子さんにも優作さんにも…他にも何人もの人を苦しめたんです。工藤君には

1年と言う時間を奪ってしまいました。彼女の元から引き離してしまっただんです。

彼にはとても辛く苦しい時間をあたえてしまっただんです。今、ここに居られるのは

工藤君のお陰だけど…私は何一つ彼にしてあげる事は出来ないんです。それなのに彼は

私を…責めてくれれば…憎んでくれればいいのに…」

「それは違うよ。新一は志保君を恨んだり憎んだりはしないだろう。それどころか、

きつと君には感謝していると思うよ。」

「かん…しゃ？…く…どうくんが？ど、どうしてですか？」

「それは親の私が言う事ではないからね。私の勘は当たるんだよ。」
そう言うのと優作は身を翻し人込みの中に消えていった。

新一は適当に復帰の挨拶を済ませるとパーティー会場からベランダへの扉を開けた。

ベランダへの扉を閉めると室内からの声は聞こえなくなり1つの空間を作り出した。

新一はベランダの手すりに背を預け両肘を掛けると仰け反るように空を仰いだ。

風が少し吹きその心地よさに目を瞑った。

少し変化した風が新一の周りに吹くと新一は

「今日は予告状出してねーだろ？何しに来たんだ？……快斗？」といるであろうその場所に

目を瞑ったまま話し掛けた。

「今日は確かに出してはいませんよ。名探偵。でも、その名前はやめて頂けますか？」

と新一と同じ声でクスクスと笑った。

新一はゆっくりと目を開け体を翻すとベランダの前にある大きな木の枝に座っている白い姿の

人物に続けて話し掛けた。

「そうだったな。その格好の時は違ったな。… K I D… で？何の用だ？」

新一もフツと笑った時、会場からの扉が開いた。

「なんや？黒羽やないか？何しにきてん？」声の主は服部平次だった。

「全く、貴方たち名探偵は。困った人たちだ。」 K I Dはそう言う
と目を瞑り溜め息をついた。

「で？何しに來たんだ？俺たちに捕まりに來たのか？」新一はクツ
クツと笑って K I Dを見た。

「違いますよ。それに今日ここへきたのはお祝いを言いに来たので
すよ。『復帰祝い』にね。」

「どうでもええケド、ええ加減その格好どうにかしたほうがええで
？中にはお前の敵さんが

ぎょうさんおるからな。でも、中森警部はさすがに予告無しではこ
られへんからなあ。」

平次も新一の隣にきて K I Dにそう告げ笑った。

「そうですね。そうそう、今日はもう一人貴方にお祝いの言葉を言
いたい方がいるのですよ。」

そう言うとK I Dはボンツと白い煙幕と共に消えた…と同時に新一と平次の後ろに

すたつと降り立った。

「しんいちー。復帰オメデトー♪」その人物は笑顔を向けた。

「何なんだよ？オメエはよ？普通に玄関からこれねえーのかよ？」
新一は快斗に呆れていた。

「だぁーってー。俺の正体、みんな知らねーじゃん？招待状来なかったしさー。」

しかもS Pがいつぱいいてまともに入れなかったからK I Dでお空から来たんだよ♪

それにさ、新一たちに会いたかったしー。」さつきとはまるで違う口調だ。

K I Dと黒羽をちゃんと分けている。

「なんや？工藤もえらい人気者やなあ？今日も主役のパーティーでぎょうさん人が集まっとるしな。」

平次がからかい気味に言うと

「バ一口。何が主役だ！そんなの肩書きに決まってるだろ？現に俺がいなくても

誰一人気付いてないじゃねーか。騒ぎたい奴等ばつかだよ。」

「そらそーや。俺もその一人やしな。」とケケツと笑った。

新一は手すりから体を離すとパーティー会場へ足を進めた。

「何や？戻るんか？」と聞かれ「いや、ちょっと目暮警部に話があるてな。すぐ戻るよ」

「しんいちー。俺がいることチクらないでね」快斗はそう言つて手をひらひらさせた。

「ああ、言っておくから心配すんな」そう言つと会場の扉を開けた。

「！！」快斗は瞬時にしてベランダから飛び出し木の上に移動した。

ガチャ

パーティー会場からの扉を開けたのは蘭だった。

「あれ？服部君一人？さっき誰かいなかった？」蘭はあたりを見渡した。

「お、おう、俺一人やで？何や？工藤ならさっき目暮はんとこ行ったで？」

平次は目をきよろきよろさせながらも平静を装った。

「あつ、うん。知ってる。…その、服部君に…聞きたい事があつて。」

「何や？」

「…その…服部君、新一から何か聞いてる？」蘭は俯きながら言葉を探した。

「ん？何をや？」平次は蘭を不思議そうに見つめた。

「ん。新一って…何か戻ってきてから…少しおかしい…からさ。何か聞いてない？」

服部君は何か気付かない？」

「いや？別に俺は何も聞いてへんぞ？工藤がおかしいって？そうやるか？」

平次は会場内の新一の姿を見ながらそう答えた。

「そ、そう。ならいいんだ。じゃあ、私の勘違いね。ごめんね。変なこと聞いて。」

そう言うと蘭は会場へと戻っていった。

「…お前も何かは気付いてんのやろ」平次は蘭の後姿を見送ると

「…うん。あの子の言いたい事は分かるよ。平次も知ってるんでしょ？」

そう言うと再び快斗が平次の横に降り立った。

「ああ、工藤からは電話でしか話は聞いとらんかったけどな。工藤は氣についてないな。」

「そうだね。新一、自分の事に関しては鈍感だからね。」そう言つとクスクスと笑つた。

「あのねーちゃんには可哀相やけどなあ。こればかりはどうしようも出来へんわ。」

「そうだね。」快斗も平次に同感した。

第8話：Party（後書き）

うん。書きたいことが多すぎて何から手をつけていいのか…。こ
こら辺が話の折り返し地点って感じですよ。

（・口・）って事は13・14話位いっちゃうかも…。

長いお付き合いをお願いします。

第9話：組織VS

「はあー。目暮警部なかなか離してくれねーから参った。」

新一が溜め息をつきながらベランダへと入ってきた。

「そら、お疲れさん。なあ？工藤。お前、毛利のねーちゃんには何かいったんか？」

平次がそう新一に問い掛けると、新一は平次と快斗の開いた空間にまた手すりを背に持たれかけさせた。

「ああ？何だ？急に？別に何も言っただけよ？」新一が疲れたように首を回しながら答えると

「何でや？ちっさなっとなった時は何か伝えなかん事があつたんちゃうんか？」

平次は新一とは逆に庭に体を向けて新一の顔を見た。

「…そう…だったんだけどな。なんかわっかんねえーけど…言っていないよ。」

「なあ、俺って変か？」少しの沈黙の後、新一はそう切り出した。

平次と快斗は二人、目を合わせてそれから新一を見た。

「蘭も言うんだ。それに…志保も。俺は変わってねえと思うけど。でも、やっぱり何か違うんだよ。」

その何かはわっかんねーけどな。」

頭をクシャクシャさせて新一が溜め息まじりに吐き捨てた。

「確かに新一は変わったよ。」快斗はクスクスと笑って新一の肩を叩いた。

「どうやって？どこが？」新一は快斗を見たが快斗はそんな新一を無視してある人物に手を振った。

その目線の先には会場の隅で独り窓の外を眺めている志保だった。

志保はその視界に快斗の姿を見つけて微笑んだ。

快斗は振っていた手を手招きに変えた。

志保は溜め息をついてゆつくりとベランダへと歩いてきた。

「こんばんは。黒羽君。貴方がいるなんて思わなかったわ。居ても大丈夫なの？」そう言つとクスクスと笑った。

「志保ちゃんまでそういうこと言つの？この姿みてよ。どっから見ても天才マジシャンでしょ？」

「どこをどう見て私服姿のオメエをマジシャンって言っただよ？しかも『天才？』ふざけんなつつの！」

「もー！新一は！冷たいんだから！！！！それにしても志保ちゃんは相変わらず綺麗だねえ♪」

白衣姿もいいけどその格好もいいね♪」

快斗がもし犬だったら尻尾がちぎれるほど振っているだろう。ほど喜んでいた。

「ありがとう。黒羽君には本当に感謝してるわ。あの時も貴方にはたくさん助けてもらったもの。」

「僕は志保ちゃんの為なら火の中水の中、何処にいても助けちゃうよ♪」

志保はフフツと笑い

「服部君にもたくさん迷惑かけたわね。改めてお礼を言っわ。本当にありがとう。」

志保は平次にも目を向けた。

「そんな礼言われるほどの事してへんわ。あの組織が壊滅して平和になったから良かったやんけ？」

組織が壊滅した時に快斗も仲間だった。

4人はそれぞれあの時の事を思い出していた。

「灰原！待てって！」コナンは哀の腕を掴んだ。

「工藤君は服部君たちのところに戻って！私は大丈夫だから！」

「大丈夫なわけ無いだろう？お前一人じゃ無理だ！」

「私1人のほうが動きやすいから。大丈夫。データの場所は組織に居た時と変わってないって

情報は既に掴んでいるもの。だから、貴方は皆のところへ。」

「まだ、ジンやウオツカは捕まってるんだ！どこから狙ってくるか分からねえだろ！」

「じゃあ、貴方はここでジン達が来るのを見張ってて！！この先は行き止まりになるの。」

抜け道は無いわ。だからこの先にジンが居る事はないから、何かあったら探偵団バッチで

教えてちょうだい。」

「…………灰原。」

「私は大丈夫。絶対にデータを持ってくるから。」

「分かった。でも無理するんじゃないぞ。データは二の次だ！！やばくなったら逃げるんだ！！」

「分かったわ。じゃあ、また後でね。」

コナンは哀の腕を離した。

（工藤君。データは必ずとって見せるわ…この命に代えてもね…。
だから…だから）

「よう、シエリー。待ってたぜ？」

データのある一番奥の部屋の扉を開けて哀が中へ入ると最も会いたくない人物が…立っていた。

「！！…ジン。…どこから！！！」

「お前が出て行ってからどれだけの月日がたったと思ってるんだ？」

「フツ、簡単にはデータは貰えそうも無いわね。」

「まさかあの薬がそこまで完成していたとはなあ？ただでは手放す事は出来ないな。」

シエリー？お前の命と引き換えにするっていうのはどうだ？」

「命と引き換え？そんな条件での取引なんてごめんだわ。データは貰っていくわ！！」

「威勢がいいな。今のお前に何ができるかな？」

哀は拳銃を頭に向けられ一步も動く事が出来なかった。

（どうすればいいの？死など怖くは無い…でも…データを奪わなければ…工藤君が…）

「シェリー。俺がお前を眠らせてやるよ。永遠になー!!」

「させねーよ!!」

ジンの放った銃弾が哀の腕を貫いた。

「つつ!!」哀は顔を歪めた。

「うつ…針? くつ…」ジンは崩れ落ちながら顎の下…喉付近に手を当てた。

「?! 工藤君? ど、どうして?」

「灰原!! 無事か? ジョディ先生から連絡が入ったんだ。前と研究所内が変わってるってな。」

だからこの部屋ももしかして以前と違うんじゃないかって思って。」

コナンは哀が撃たれる瞬間ジンの首に麻醉銃を放っていた。

「哀ちゃん? Cool Kid? 大丈夫?!」

「ジョディ先生! 俺は大丈夫だけど灰原が撃たれたんだ!!」

「直ぐに手当てを…」

FBIが数人駆け込んできて一斉にジンに銃を向けた。

「ふんっ、FBIのお出ましか?」ジンはよろけながらもその口元を引き上げた。

「ジン。これでオメエもお終いだな？後はゆっくりテメエの悪事を吐くんだな。」

コナンはジンの前に立ち笑みを浮かべた。

ジンは無言で…口元に笑みを浮かべたまま…銃口を自分の頭につけた。

「なっ…」

FBI、コナンがその動きをみて飛び掛ろうとしたのと同時に…銃は放たれた。

ジンは崩れるように倒れ地面は血で染められていった。

「じ…自殺……だ…と？っ…ちつくしょー！！」

コナンは地面をこぶしで叩きつけた。

「……息はありません。どうしますか？」FBIの1人がジョディに向かって話し掛けた。

「……そう。念の為に運んで頂戴。」そういうと数人がジンを担ぎ出で行った。

「く…どうくん。」

「ここまで追い詰めたのに！！全てこれで終わるはずだったのに！！」

「もう、終わったのよ。ジンは、捕まる事なんてしないわ。」

…捕まるくらいなら……そういう奴だったのよ。」

「とにかくここも危険だわ。早く！！逃げるわよ。」

ジヨディの一言にコナンと哀は脱出した。

「新一！哀ちゃん！無事だったんだね？」

「工藤！どないなってる？あれ、ジンって奴やろ？殺ってもうたのか？」

「いや。自殺したんだ…自分の頭に銃を向けてな…追い詰めたのに…あそこまで追い詰めて…」

なのに…くっそー！！」

「…新一。とにかく！新一も哀ちゃんも手当てが先だよ。」

2人は擦り傷だらけでコナンは腕を骨折していた。

「工藤君。…もう終わったのよ。後はFBIにまかせましょう。」

快斗に手当てをうけながら哀はコナンを見つめた。

「灰原！！デ、データは？」

「もちろん。」そう言ってポケットからMOを取り出してみせた。

4人は燃え盛る研究所を眺め続けた。

どれだけの沈黙が続いたのか…沈黙を破ったのは志保だった。

「私、そろそろ帰るわ。」

「なんや？もう帰るんかー？」

「じゃあ、志保ちゃん、俺が送っていくよ！夜遅くにこんな綺麗なお姫様を独りで帰せませんから」

そういうと志保の前に立ち手を差し出した。

「あら？ありがと。優しいのね？じゃあ、お願いするわ。」志保は笑いながらその手をとった。

「俺も帰る。だから志保は俺が送っていくよ」新一はそう言つと会場へと歩き出した。

「へ？新一帰るの？」快斗は新一が不機嫌な顔をしている事に気付いていた。

でも、その行動を阻止したのは…志保だ。

「何言ってるの？工藤君。貴方は駄目よ！！」志保の言葉に新一は驚いて振り向いた。

「何で？」

「貴方は今日の主役でしょ？貴方が帰ったら駄目でしょう。貴方は居なさい！」

帰りは黒羽君に送ってもらってから大丈夫よ。じゃあ、服部君もまたね。」

そう言っていると志保は新一の脇をすり抜けた。

「おつ、おい！志保！！」新一の言葉にも立ち止まる事もなく志保は会場へ入っていった。

「志保ちゃんはちゃんと送り届けるから、心配しなくていいから。新一は志保ちゃんの言うとおり」

ここにいなよ。じゃあ、平次後頼むね♪」そう言っていると快斗は志保の後を追った。

（へい、へい、任しときつ…てか）平次は快斗の言葉の意味を承諾した。

「何だよ？別に俺がそこまでここににいる理由はないだろ？何だよ？つたく！」

新一は再び平次の横に來ると手すりにもたれた。

「ホンマ、お前は自分の事に関してはあかんなあ」平次は呆れた顔で新一を見た。

「ああ？何のことだ？」

第9話：組織vs（後書き）

組織絡みの話って難しい…。ジンの冷酷さが中々上手く表現出来ないわ。

次回は平次と快斗が頑張ってます♪

快「やっと俺の番じゃん？」

平「世話のかかるやつぢやなあ」

優「私の番は？」

作「もう終わりました。お疲れ様デース。」

有「えー？私はあれだけ…？優作ばかり格好いいじゃない!!」

佐「私達なんて名前だけよ！酷いと思わない？高木君!!」

高「そっ、そうですよね。さっ、佐藤さん！（*^ ^*）

第10話：新たな想い

志保は快斗と共に鈴木邸を後にしていた。

「黒羽君。私1人で帰れるから工藤君たちのところに戻っていいわよ。」

志保は立ち止まり快斗を見た。

「駄目だよ！新一に、ちゃんと送り届けるって言っちゃったしね。それにそれがなくても」

俺はこんな暗い夜道を志保ちゃん1人で帰らせるなんて出来ないよ。

「

「ありがとう。優しいのね。」そう言つとまた歩みを進めた。

「志保ちゃん…新一の事好きでしょ？だから、あんなこと言ったんだよね？」

歩きながら横にいる志保を見た。

「あんな事って？」

「ここにいなさい！ってさ。新一の事好きだから二人で一緒にいるの辛いんでしょ？」

一緒に居たいけど…辛いんでしょ？第三者がいると平気だけど…」

志保は表情を変えずにいつものクールな声で

「好きじゃないわ。それにあの人が帰る理由なんてないでしょ？一緒に帰ってもどうせ」

真つ直ぐには自分の家に帰ったりしないし、やる事が増えて迷惑なだけだったからよ。」

「まったく、素直じゃないね？何で気持ち隠すの？好きなら好きって言えば…」

「好きじゃないっていつてるの！！別に隠してなんかいないわ！」

志保は立ち止まり快斗の言葉を遮り睨みつけた。

「それが素直じゃないって言うてるんだよ。もしかして、自分は幸せになっちゃいけない」

…なんて事思ってるの？それが自分に対しての償い？」

快斗も少し歩いた所で立ち止まり振り返って志保を見た。

志保は俯いて快斗を見ようとしなかった。

「志保ちゃんはもういっぱい苦しんだでしょ？新一も元の体に戻ったんだし。」

これ以上自分の気持ちまで隠して苦しまなくてもいいんじゃない？そりゃーさあ、

新一には探偵事務所の昔からの幼馴染がいるのは事実だけどさ。

でも、それは志保ちゃんとは関係ないじゃん？新一が探偵事務所の子を選ぶか

志保ちゃんを選ぶかなんてわかんないしき。そう思わない？」

快斗は志保に近づき顔を覗きこんだ。

志保は顔を上げてクスツと笑うと

「本当に、貴方は…はつきりと言うのね？その分じゃ、西の名探偵さんも

…知っているわね。」

「平次？うん。平次も知ってるよ。知らないのは新一だけだよ。」

「そうね。…あの人にばれたら私はここにいられないもの。それに…

私ちゃんと幸せだから…大丈夫よ。黒羽君。」

「違うよー。志保ちゃんちつとも幸せそうじゃないじゃん。」

「あら？そう見える？幸せよ。毎日、学校から終わると家に来てくれるもの。」

毎日顔が見れるんですもの。…だから…だからそれで十分よ。」

志保はそう言うと再び暗闇へと歩き出した。

（ふう。志保ちゃんもやっぱり分かってないのか…。どうしたものかなあ。）

快斗は深く溜め息をつき志保の後ろを歩きはじめた。

「ありがとう、黒羽君。珈琲でも飲んでいかない？」

阿笠邸の前まで来ると志保は門の中へ入って振り返った。

「ううん。いいよ。今日は帰るよ。送り狼になったって言ったら

新一に殺されちゃうもん」

「何それ？」志保はクスクスと笑った。

「…ねえ、志保ちゃん？新一は何で毎日ここへ来るの？」

「何でって…いつも夕飯はここで食べるからよ。」

「ふうーん。じゃあ、夕飯食べたらすぐに帰っちゃったりする？」

「…いいえ。珈琲飲んで、後は…別に小説読んだりテレビ見たりしてるけど？」

「……………何がしたいの？」

志保は快斗の質問の意図が見えずにいた。

「んー。志保ちゃんもかなりの鈍感なんだ。」

「だから…何が言いたい…っ!!」

志保は目を見開きニヤついた快斗を見た。

「ピンポン！志保ちゃんの考えてる事当たってるよ。」

「そっ、そんな事ないわよ。…だって、あの人…」

志保は快斗を凝視した。

「うん。新一は気付いてないんだよ。自分の気持ちも、志保ちゃんの気持ちにもね。」

無意識にしてる行動だよ。それに…さ。新一は彼女に何も言っていないよ。

…志保ちゃんが考えてる事をね。」

「な、なんで？」

「自分の気持ちには気付いてないけど彼女に対してはそういう気持ちがないから」

勝手に拒否反応を起こしてるんだよ。自分では気付かないけど『言っ
つては駄目だ』ってね。」

「そ…そんな。」志保はあまりに突然の快斗の告白に言葉が出なかった。

「もうすぐ、幸せになれるよ。」

「えっ？それ…どういう事？」

「俺、志保ちゃんの事好きだから幸せになってもらわないとね。勿論、

新一も平次も大好きだけどね。じゃあ、俺帰るから。新一に伝えといて。

「今度の対決は一週間後！！ってね」

快斗はそう言うとき歩いていた道を歩き出し暗闇へと姿を消した。

志保はその後姿を見送り家へと入った。

「ホンマ、お前は自分の事に関してはあかなあ」平次は呆れた顔で新一を見た。

「ああ？何のことだ？」

「工藤はどうして毛利の姉ちゃんに自分の気持ちを言わんのや？」

「だーから！それがわかんねーって言ってんだよ！」

「あの姉ちゃんの事好きやないんちゃうか？」

「そ、そんな事ねーよ。俺はコナンのときから…いやその前から蘭の事…」

…好きだった…んだから。」

「じゃあ、何でいわへんのや？おかしいやないか。」

「…そ、それは、何か言っちゃーいけねーよーな気がして。」

「ほんなら、宮野のことはどうおもーとるんや？」

新一は眉をひそめた。「はあ？志保ー？何でここに志保が出て来るんだ？」

「まあ、ええやないか。で？どう思うとる？」

「…志保か…。あいつは独りぼっちだからなあ。明美さんも両親もいねーんだ。」

前も寝てる時に泣いてたんだ。寝言も言ってた。『お姉ちゃん、行かないで』ってな。

気付いた時には組織に入れられて利用されていた…。あいつはいっぱい苦しんだと思うよ。

コナンの時にな…『運命から逃げるな』って言ったことがあってその代わりに

『俺が守ってやるから』って約束したんだ。組織が壊滅して、もう

誰もお前を狙う奴なんて

いないっていつてるけど安心してねえんだよ。今までの恐怖がそれを拒否してるんだ。

平和が怖いってさ。そんなあいつを見てるとまだ守ってやらなきゃって思うよ。

もしも、まだあいつを狙う奴がいたとしたら、俺はあいつを守るよ。命かけても守ってやらねーといけねーんだよ。」

「…工藤。お前やつばアホやろ?」

平次はがつくりと頭を落として呟いた。

「はあ? 何で俺がおめえにアホって言われなきゃなんねーんだ?」

「アホやなあ、ここまでゆつてもわからんのか? 自分の気持ちにいかげん

気付けちゅうとんじゃ!」

「????なんだよ? 自分の気持ち?」

「宮野のこと守ってやりたいちゅうのは、愛の告白にはならんか?」

!! 新一は平次の言葉に絶句した。

「やっと、わかったんかい? ホンマ、他人の事はえらいぎょーさん

突つつくのになあ。

東の名探偵の看板降ろしたほうがええんちゃうか？」

平次はフフンと笑って見せた。

「……ああ、やっと分かった。…何で変わったか…。」

「ほんなら、はよ帰ったり。あとの事は任しとき。」

「ああ、わりーな。また連絡すつから!!」

そう言っていると新一は走って鈴木邸を出て行った。

「ただいまー♪」

新一が出て行ってから数分後、まだベランダに出ていた平次に声をかけた。

「…せやから玄関からはいれっちゅうに!!」

「だからさ。招待状ないからって言ってるじゃん。門には鈴木会長のSPがいつぱいだもん(TT)」

それより、ここに戻る途中、新一見たよ。さすがは西の名探偵！服部平次だね？」

「当たり前や。そっちも上手くいったみたいやな？でも…もう一つ問題が残つとる。」

「そうだねえ。こればかりは新一が何とかしないとね。」

二人は会場内の1人に目を向けた。

「ガチャー」

会場の扉がまた開けられた。が、快斗はその場所から逃げ出す事はしなかった。

「やあ、お揃いだね？楽しんでるかい？」

「ぼちぼち楽しんでます。あの時はえらい世話になってしもうたな。」

「いやいや。君達にはとても感謝しているんだよ。君達もかなりの勇気がいっただろう。」

「新一や志保ちゃんの為なら僕達は命かけれるんで♪ねー平次？」

「そやな。ほっとかれんからな。」

「勿体無いくらいの友人を見つけたようだな、新一は。その新一の姿が見えないようだが…」

もしかして、上手くやってくれたのかな？」

「あれ？工藤先生も気付いてたんだ？あの二人の事！」

「ああ、有希子からは話は聞いていたしね。新一のあの態度をみれ

ば…ね。」

優作は片目を閉じ意味ありげに、にっと笑った。

「知らんのは本人だけやったちゅうこつちゃ。世話のかかる二人やな。」

「じゃあ、今日は用事が入ったから失礼するよ。またゆっくり話でしようじゃないか。」

そう言つと優作は片手をポケットに突っ込み会場へと戻っていった。

二人は軽く会釈をして優作の後姿を見送った。

「そーゆつたら、お前はええんか？宮野のこと気にいっとつたやろ？」

「あら？仕事の帰りかしら？」

深夜12時を回ろうとしていた公園の一角で志保は声を掛けた。

「そうだよ。さっきまで新一もいたんだけど帰っちゃったよ。志保ちゃんはどうしたの？」

「こんな遅い時間に。」

「ちよつと眠れなかったから散歩…」

満月の月明かりに照らされて君は綺麗に色付いていたね。

「ねえ、志保ちゃん。俺ってよく分かったね？こんな月明かりだけの俺を見て…」

「？分かるわよ？工藤君が『今日は読みたい小説があったのに快斗が予告状出すから…』」

って怒ってたし時間も終わった頃だったから…」

「そうじゃなくて！！俺と新一を見間違わなかったじゃん？」

「黒羽君と工藤君を？間違わないわよ。貴方達は違うもの」志保は笑みを浮かべた。

「そうかなあ。結構間違われるけどなあ。平次だってたまに間違えたりするし…」

「そう？全然似てない…とは言い切れないけど…私は…間違えたりしないから。」

大丈夫よって笑った。

そう言ってくれるのは志保ちゃんだけだよ。あとは新一の両親…位かな？

新一の事好きだから間違ったりしないよね。

「志ー保ちゃん」志保の前に立ち呼んでみた。

「何？」

「志保ちゃん。」もう一度呼んでみた。

「だから何よ？」クスクス笑った。

「…志保。」

「……………何？」少し笑顔が消えちゃったね。

背中に手を回して抱いてみた。ピクリともしない。

だから…だから。意地悪してみたんだ。

「『志保』」新一の声色を真似て…。

少し体が反応して肩が揺れた。

「『志保』」もう一度呼んでみた。新一の声で…。

「何考えてるの？」

「『志保』」

「やめなさい。そんなことしても貴方は工藤君じゃないから。」

「『志保…好きだよ。』」

「…私は嫌いよ。工藤君も…そんなことする…貴方もね。」

怒っちゃった。だから…いつもの俺に戻る事にした。

「ゴメンネ。志保ちゃん。もうこんな事しないから嫌いになっちゃだよ?」

「…嫌いになんてならないわ。じゃ、私帰るから。貴方も早く帰きなさいよ。」

「じゃあ、送っていいとか?お姫様?」

「……………いいわ。1人で帰れるから。」

「…そつか。じゃあ、志保ちゃんまたね。」

「ええ。」

「『宮野』。変な奴におうても変な薬飲ませたらあかんで。』」

「馬鹿ね」振り向いてそう言つとまたいつもの笑みをくれた。

平次の声色を真似たのは…この場の空気が嫌だったから。このまま志保ちゃんと

さよならしたくなかったから…でもこれでまた大丈夫。

また志保ちゃんに…笑つて…会えるよ。

志保の後姿を見送った後快斗は空を見上げた。

「新一にはなれないよな。声を真似たつて…俺は新一じゃないもん

な。

志保ちゃんの求めてるのは俺じゃない。新一だもんね。声や顔が似てるだけで

俺の事とか好きになるんじゃないって……『新一』がいいんだよね。」

新一には敵わないなあ……志保ちゃんにも……

送っていくって言ったのを断ったのは俺の状態を気遣ってくれたんだね。

いつもなら絶対に「ありがとう」って言うてくれて……送らせてくれた。

でも今日は……そんな志保ちゃんだから好きなんだ。

俺は新一とは違う……俺は……黒羽快斗……他の誰でもないよね？

満月の月明かりを浴びてその満月に誓ったんだ。

12人を見続けていこうー守っていこうってね。

「んー？新一と志保ちゃん達の想いに比べれば俺のなんてたいした事ないよ。」

志保ちゃんのことばだーいい好きだけど志保ちゃんの幸せは俺の幸せ

でもあるしね」

そーゆう平次も…じゃないのー？」

「あ？俺はそないな感情持つてへんけど…宮野は大変やってんから、
幸せになる権利はあるちゅうこっちゃ」

「そうだね。…じゃあ、行きますか？」

「へ？何処にや？」

「志保ちゃんには幸せになつて欲しいけどさー。ちょっと悔しいから
お邪魔しに（^^）v」

「…心狭いやつちなー」

第10話：新たな想い（後書き）

新「俺等って両想い？」

志「／／／／／／／／（赤）」

快「俺と志保ちゃんは？」

平「ないんちゃうか？新×志やる？」

快「そんな〜！！作者！！快×志作ってよ！！」

作「ヤダ。新×志が好きだもん。」

快「（- -）分かった…邪魔してやるー！！！！」

って事で次回は新×志メインです♪

快斗の反撃はあるのか？？？もお楽しみに♪

第11話：二つの想い（前書き）

新一と志保の想いがそれぞれの場所で明白となった。

快斗が過去に志保への気持ちを封印してまで、新一と志保に何を託すのか？

第11話：二つの想い

志保は阿笠邸のリビングのソファに身を埋めていた。

（工藤君が…私を？…黒羽君が言うとおり工藤君の行動は彼女にはおかしく見えると思う。

現に屋上での行動は工藤君らしくなかった。偶然学校の帰り道であった時も…

私のことは何一つ話していなかった。多分、前の工藤君なら彼女には何もかも話していたと思うし。

でも、毎日登下校はちゃんと一緒にしてるし…。…分からない。）

志保は溜め息をつきソファから立ち上がった。

そして着替えをする為に地下の自室へ戻ろうとした時に玄関のドアは開いた。

「博士？早か…！！工藤君？」

息を切らして玄関のドアを開けたのは新一だった。

「ど、どうしたの？工藤君。何かあった？」

志保は息を切らせて走ってきた新一に歩み寄りながら問い掛けた。

「い、いや。何でもねーよ。それより快斗は？いねーじゃん？」

「珈琲でもって言ったんだけど帰るって…。それと工藤君に伝言を残していったわ。」

「伝言？何て？」新一は息を整えながらソファーに座った。

「貴方との対決は一週間後ですって。あと、貴方の事大好きって言うていたわ。」

人気者ね…そう言つとクスツと笑った。

「は？何で急に告白されてんだ？俺。それに…怪盗がワザワザ予告すんなよ。」

新一は呆れて言った。

「あら？どっちにしても彼は予告状出すんですものいっしょの事だわ。」

また彼と追いかけてこするの？」

「『追いかけてこ』って…。でもまあ、そんなとこだな。あいつの行動を推理して

追い詰めたりするけど最後は警察に任せるからな。あの中森警部じや快斗は捕まえられねーよ。

俺もあいつを捕まえる気はねーからな。服部も同じ気持ちだろーし。

」

「『永遠のライバル』ってところかしら？運命共同体…いいものね。」

「オメエだつてそうだろ？独りじゃないさ。快斗も服部もお前を仲間って思ってるよ。」

「じゃなきゃ、快斗もあんなになつかないだろ？」

「なつくつて…まるで犬ね…。」志保は快斗の尻尾を振っているところを想像して

プツと吹き出した。

会話が途切れると沈黙が続いた。

「…志保。その、話があるんだ。」新一がソファから背を離して志保を見ると

「何？」志保は快斗の言葉を思い出したが平静を装って答えた。

「その…座らないか？」

「結構よ。で？話つて？」志保はあえてソファに座る事を拒否した。

「……ああ、」

新一は今までの自分の気持ちをどうやって話を切り出すか悩んでいた。

「何よ？私、お風呂にも入りたいし、まだやる事あるんだけど？」

志保は冷静な口調で新一を睨みつけた。

「ああ、わりい…その、なんていうか…」新一はそれでもなお、想いを言い出せずにいた。

（何を言いたいのかしら？黒羽君が言ってた事が本当ならこんなに考えたりするかしら？）

志保ははつきりしない新一に

「もう、いいわ。私お風呂に入るから。用がないなら帰ってちょうだいね。」

そう言うとバスルームに歩いていった。

（はあー。どうしたらいいんだ？志保に対しての気持ちはハッキリしてる…。

でも、志保は？志保は俺の事どう思ってるんだろ？

…どうも思ってたねーだろうな。それに…あいつは好きな奴がいるって…

！…もしかして…好きな奴って快斗？さっきも嬉しそうにしてたしな…

でも俺はアイツを守ってやりたいって…思う。

言ったところであいつの事だ『大きなお世話よ』とかって言われそうだな。

……でも、俺はあいつの側に居たいんだ。あいつがどう思おうと俺がそうしたいんだ。」

決めた！！そう思うと新一はソファーに身を沈めた。

「あら？まだいたの？」

志保がバスルームからリビングに戻ってきて呆れた口調で新一を見た。

「！！ああ、話があるって言っただろ？」新一は風呂上りの志保を見て目をそらした。

（つーか、俺の気持ちを知っててそんな格好であられてんのか？）

「そう？じゃあ、珈琲でも飲む？」志保がキッチンへと向かった。

志保は珈琲が入ったカップを新一の前に置くと向かいのソファーに座った。

新一は体を沈めていたソファーから背中を外すと珈琲を一口飲んだ。

「はあー。やっぱ、うめえなあ、志保の入れた珈琲は！」

「あら？ありがとう。お世辞が上手くなったわね。」

「お世辞じゃねーって。マジ美味いつて。」

「で？話って？」志保は珈琲を飲むと新一を上目遣いで見た。

「俺…気付いたんだ。自分の気持ちに。」

「…自分の…きも…ち？」

「ああ、俺…蘭が好きだ。」

「…っそ、そんなこと聞かなくても知ってるわ！なに？のろけを聞いて欲しかったの？」

馬鹿馬鹿しい！私、調べものがあるから…」

そう言つてソファから立ち上がると新一は立ち上がり志保の腕を掴んだ。

「何？」志保は腕を振りほどき睨みつけた。

新一は志保の座っていたソファに腰をかけて「まだ、話は終わってねえ。座れって！」

志保は新一の隣にポスツと座った。

「…コナンの時も…コナンになる前も…俺は蘭の事が好きで、蘭の所に帰る…それが願いだつた。」

「…知ってるわ。だから、貴方は彼女のところに帰ったんでしょ？」

「ああ、でも…好きとか…言ったりしてねえよ。」

（…それも知ってるわ。黒羽君が言ってたもの）

「蘭に対しての『好き』は愛情じゃなかった…んだ。いつの間にか『家族愛』に変わってたんだ。」

俺も、いつからそう感じてたか…わからねえ…。蘭の事は今でも大切な幼馴染には変わりねえけど…

もつと大事な奴が出来て…そいつを守ってやりてえと思う。守ってやる！なんて大きなお世話って

言われるかもしれねえーけど…そいつの側に居たいんだ…だから…だから…

志保…お前の側に居させてくれねえか？ずっと、守っていききたいんだ。お前の事。」

「くど…くん？何…言ってるの？」

「志保の側に居たいんだ。志保が好きなんだ。」

そう言つと志保を抱きしめた。

「ち、ちよつと…工藤君？貴方何言ってるかわかってるの？」

志保は新一の胸を両手で押しのけた。

少しだけ体が離れたがそれでも新一の腕は志保の背中に回っていた。

「ああ、わかってるよ。」

「分かってないわ！私は貴方の人生を狂わせたのよ？私が居なかったら…あんな薬を作らなければ

貴方はこんな事にならなかったのよ？それなのにどうしてそんな事がいえるの？」

「志保！落ち着けて。…志保が居なかったら俺が幼児化することもなかった？」

本当にそう言い切れるか？」

「えっ？」

「志保が居なくてもあの薬は他の誰かが作っていたんじゃないか？」

組織にいたころ研究員は志保のほかにも大勢いた。

確かに志保が薬の研究を進めてはいたけど助手は何人もいた。

その人たちが時間をかければいつかは志保が作り出した物に到達するであろう。

でも、志保のような才能はないから早急に完成させるために組織は志保に作らせた。

「だろ？志保がいなくてもあの薬は作られるだろうし…それにお前だけのせいじゃないよ。」

俺がウオツカを見つければ…そしてジンに見つかった…。

もし俺がウオツカについていかなければ…こんな事にはならなかっただろ？誰が悪いって

言ったらキリがねえよ。最終的に悪いのはあの組織だ。それにもう組織はないんだ。」

「でも。それでも私は…」

「もう、苦しむ事はないよ。『逃げるな』って言ったのは俺だけど…もう、逃げないでくれないか？

組織の事が忘れられねえから辛いと思う…不安で…まだ狙われてるんじゃないかって

思ってるんだろ？でも、俺が側にいて守ってやるよ。組織を追い詰めた時…

お前と二手に分かれて潜入した…あの時、お前の手を離すんじゃないかって…思ったよ。

もう、お前の手を離したくないんだ。もう、後悔したくねえんだ。志保が好きなんだ。」

新一は志保をもう一度抱きしめた。

「……こ……後悔しないの？そんな事……いつて……」

「バー口。後悔したくねーから言っただよ……志保は？志保はどう思ってる？」

「え？わ……私は……」

『好きなら好きって言えば……』

『これ以上自分の気持ちまで隠して苦しまなくてもいいんじゃない？』

『俺、志保ちゃんの事好きだから幸せになってもらわないとね』

（……黒羽君……いいんだよね？……私……隠さなくても……）

『もうすぐ、幸せになれるよ。』快斗の言葉が頭に浮かぶ……。

服部君にもまたお礼を言わなくちゃね……。

志保が自分の気持ちを言おうとした……時

「……快斗……が……好きなのか？」

「…………………へ？」志保は新一の胸から体を離した。

「だから！お前がずっと片思いしてるって相手だよ！」

志保は新一の発言にポカンとしていた。

「…誰が？誰を好きって？」

「志保が快斗を……って違うのか？」

「違うわよ！！何で私が黒羽君を好きなのよ？！何処からそんな話が出てくるの？」

「だって、さっきも快斗に嬉しそうについて行ってたし。他にお前に接点のある

男なんていないから……じゃあ、高校にいるのか？」

「いないわよ！！」

「じゃあ、お前の好きな奴って誰だよ？俺の知らない奴なのか？」

「わ…私が好きなのは………よ」志保は少し顔を赤めて俯きながら呟いた。

「え？志保…今…なんて？」新一は志保の顔を覗きこんだ。

「だ…だから…貴方の事…が…好き…なの…ずっと…前から」

「マ、マジ？じゃ、じゃあ、片思いの相手って…」

志保は顔を真っ赤にして頷いた。

新一はまた志保を抱きしめた。「サンキュ、志保！すっげえ嬉しい！」

「ちょ、ちよつと！工藤君。痛いから離してくれる？」

「ああ、ごめん。」新一はそう言っていると志保を開放した。

志保は真つ赤に俯いて「こ、珈琲冷めちゃったから新しくいれるわ。」

そう言っているとソファから立ち上がった。

志保の腕を引っ張りバランスを崩した志保を新一は自分の膝に座らせた。

「ち、ちよつと！」

新一は志保の耳元に顔を埋め『志保…愛してる』と呟いた。

新一と志保の視線が絡まり新一が志保の唇を塞ごうと顔を近づけた…。

その時…。

「はい、遊びにきたよーん。」

「……………」

突然玄関の扉が開いた。

志保と新一は慌てて顔をあげ声のする玄関に顔を向けた。

そこには…。

両手を挙げてとびっきりの笑顔をしている快斗とその後ろで苦笑いをしながら

頭を掻いている平次が。

「なっ、何でお前等…」

「遊びに来たんだよー。なにに？二人してそんな格好で何しようとしてののー？」

新一と志保は慌てて離れた。

志保は顔を赤くして俯いていた。

「なっ、何もしてねーよ。それより！何しに来たんだよ？」

快斗は新一の向かいのソファーに座り志保を見ると

「志ー保ちゃん。僕、お腹すいたー。何か作ってー」志保は顔を上げると

快斗の満面の笑みを見てくすつと笑い

「分かったわ。材料がないから簡単なものしか作れないけど…。」

「志保ちゃんの手作りなら何でもOKだよん。」

「少し待ってて」

志保はそう言うと自室がある地下を降りていった。

「まったく、何なんだよ？」新一は不満をあからさまにぶつけた。

「まあ、まあ。ええやないか、工藤！今回の事は黒羽のお陰でもあるんやからな」

はあーと新一は諦めたように溜め息をついた。

「それはそうと…工藤、まだ解決してへんこともあるんやからな？」

快斗の横に座りながら平次が口を開いた。

「ん？……ああ、わかってる。蘭の事はちゃんとするよ。」

志保が地下から上がってくるまでの数分間…3人は沈黙の時を過ごした。

「どないなつとる？」

「シート！！平次！声大きいよ。見つかったらどうすんのさ。」

快斗と平次は阿笠邸の庭先の窓から室内を覗いていた。

「で？上手くいきそうなんか？」

「うん、いい感じだよ。しかも新一ってば志保ちゃんが俺の事好

きつて

勘違いしてたみたいだよ？どついう思考回路してんのかな？」

「おっ、何や？抱きあつとんで？」

「あつ、やばいね！！新一ってば狼になりそうじゃん。

これは志保ちゃんのピンチ！！！！！！」

そう言つと快斗は一目散に玄関へと走つていった。

「っ、おい。黒羽！！ピンチ？只の黒羽の焼きもちやろ？」

そう言つと平次も快斗の後を追つた。

「はいっ遊びにきたよーん。」

（工藤。ご愁傷様。）平次が頭の中で呟いた。

第11話：二つの想い（後書き）

やっとここまでたどり着きました。結構長かった。

今回はなんか事件の匂いが…？

新「かーいーとー！！！テメエ、庭先からワザワザ覗いて邪魔すんなよー！！」

快「だから前回言っただじゃん！！へへーんだ。」

（新一＆快斗……喧嘩中）

志「……………どっちも子供ね。」

平「そやな。」

作「本当にねえ。」

快「！！新一！俺のせいじゃないって！この作者が作ってんだからサー」

新「そうか、テメエの作品だったなあ。」

作「キヤー！！（逃）」

新＆快「待てー！！！！」

志＆平「子供ね（やな）」

第12話：暗黒再び（前書き）

志保と新一の気持ちが一瞬変わった。

もう、これで全てが上手くいくはず…だった。

第12話：暗黒再び

ピンポン

ピンポン

鈴木邸でのパーティーの翌日のお昼過ぎ、工藤邸のチャイムが鳴り響いた。

（…ん？…誰だよ？）新一は寝室のベットから起き上がり玄関へと階段を下りた。

玄関を開けると蘭と和葉、園子が立っていた。

「何ー？新一今起きたの？今日の夕方には和葉ちゃん達、大阪に帰るから今日は

皆で案内するって言ったじゃない？」

蘭は呆れたように新一を見上げた。

「ああ、そつか。そうだったな。じゃあ、リビングで待っていてくれ。服部も起こしてくるから。」

そう言うところをリビングへと案内して新一は2階へ戻った。

「おい。服部！起きろ！蘭たちが迎えに来てっから！」

「んあ？もうそないな時間か？昨日あんま寝てへんやんか？」

「しょうがないだろ？早く起きて準備しろ！下で待ってんだから。」

平次は寝惚けながらも両手を伸ばしてベッドから起き上がった。

「…なあ。工藤。昨日の話やねんけど…ねえちゃんにはいつゆうんや？」

新一は着替えていた手を止め、少し間をおいてから

「今日、言つつもりだよ。お前らを送った後でな。」

「そうか。こればかりは俺にはどうにもできひんから…」

「お前らには感謝してるよ…すぐに丸く収まるって訳にはいかねーと思う…でも、

俺の気持ちはかわんねーからさ…時間がかかっても分かってもらえるようにするさ。」

早く降りてこいよ。そう言つと新一は先にリビングへと降りていった。

平次は無言でその背中を見送った。

「面白かったわー。今度は蘭ちゃん達が大阪来てな？エエトコまだまだあるから、案内したるわ。」

和葉が蘭と園子に笑顔で話していた。

昼過ぎからの東京見物が終わり東京駅へ平次と和葉の見送りでホームに来ていた。

5人が他愛もない話をしているとホームに続く階段をある人物が駆け上がってきた。

「あれ？博士？」

その姿を一番に見つけた蘭がそう呟くと

皆がその方向へ目を向けた。

「新一ー！新一ー！大変じゃー！」

博士は息を切らせながら新一を呼んだ。

「どうしたんだよ？博士？何かあったのか？」

「しっ、志保君が…！！」

「？！志保がどうしたんだよ？」

新一は博士の肩を掴みそう叫んだ。

「そっ、それが…居ないんじゃないよ。」

「居ない？あいつ、もしかして出て行ったのか？」

「いや、それが…財布も机の上にあったし、荷物を持っていった形跡はないんじゃないか…」

学会から帰ってきたら玄関のドアが開いていて、夕飯の買い物袋はキッチンにそのまま

置いてあったんじゃないよ。」

「どういうこっちゃ？じいさん、何か聞いてへんのか？」

「い、いや。志保君がわしに黙って出掛けるなんてことはないから
のう。」

「…もしかして…奴等が？」

新一は顎に手をあててそう言つと平次は

「何ゆうとんのや？奴等は壊滅させたやないか！！」

「ああ、確かに…な。だが、FBIに引き渡した人物はあくまでも
上層部関係だ。」

下っ端の生き残りがいない訳じゃない！組織がなくなってそれを恨
んで…その可能性は十分にある。」

「それがホンマならどうやって宮野を探しだすんや？」

「新一！！警察に連絡したほうが……………」

「いや。警察はまだダメだ！！まだ組織と決まったわけじゃないし、

警察に組織の事はへたに話せないから。

とにかく、博士はジヨディ先生に連絡を！何処まで掘り出せるか分からないけど調べてもらうしかないな。」

『RRRRRRRR RRRRRRR』

新一の携帯が鳴り響いた。

「はい。くど……！快斗？！……ああ……分かった！……そうしてくれ！服部とすぐそこ行くから！」

「何や？黒羽か？」

「ああ、志保の居場所がわかった。今から快斗と合流する。博士はジヨディ先生に連絡してくれ！」

「ああ、分かった。」

博士はそう言うのと急いで階段を下りていった。

「しつ、新一？宮野さんがどうかしたの？組織っていったい？」

蘭は不安な目で新一を見ていた。

「なんやの？平次、事件？」

和葉も首をかしげて平次と新一を見ていた。

「ああ、和葉は先に大阪帰るとき！」

「ええ？何で？ええやん。一緒に……。」

「あかん！！お前は大阪帰るとき！」

「……………わかった。」平次の勢いに押され和葉は言葉に従った。

「服部君も…宮野さんの事知ってるの？」蘭は平次にも不安な目を向けた。

「お、おう、ちょっとな……。」

「蘭、わりい、今話してる時間ねーんだ。また後で連絡すつから！」

そう言うと、平次と新一は階段を駆け下りていった。

「ねえー蘭。どういう事？新一君と宮野さんってお隣同士だったって訳じゃなかったの？」

「あつ…う…ん。何か、前の事件で知り合ってたって…言ってた。」

「ふうーん。でもなんかあの慌てようって普通じゃないよね？」

「組織…とかってゆうてるんやから大きい事件がらみだからちゃう？心配する事ないって、蘭ちゃん」

「う、うん。そ…だね。」

蘭は1つの不安を抱いたまま新一が去った階段を見つめていた。

新一と平次が現場に到着すると博士から連絡を受けたFBIが一足先に到着していた。

「新一！！こっち、こっち！」

快斗が新一を見つけると両手を振っていた。

「快斗！志保は？」

「うん。無事だよ。強力な睡眠薬を嗅がされたみたいで今、あそこのワゴンの中で眠ってる。」

そういうと、後ろのワゴンを指差した。

「で？犯人は？」

「やっぱり、組織の人間だったよ。でも3人だったから、FBIがあつという間に捕まえちゃったよ。」

新一ごめんね。志保ちゃんすぐにでも助けたかったんだけど…油断しちゃって…」

「いや。居場所を教えてくれただけでも助かったよ。傷の具合はどうなんだ？」

快斗は右足に銃弾を受けていた。

港の倉庫外の一角

「こいつがシエリーか？」

「ああ、一度研究室であつた事があるからな。」

「で？どうするんだ？」

「殺るに決まつてる…こいつのせいで組織は無くなつちまつたからな！」

3人は倉庫の床に横たえた志保を見下ろしていた。

ガタツ

「誰だ?!」

（チツ…ばれたか…しょうがないか…）

「その子を返してもらつよ。」

快斗は倉庫内の物陰に隠れていたが意を決して犯人たちの前に姿を見せた。

「…!!お前は？工藤新一？」

「えっ？あの…高校生探偵の？」

（まったく。こんな所まで来てまだ新一かよ……。まっ、いっか）

「新一じゃないけど…その子返してもらっよ。それにお前らはもう後が無いから大人しくしてな!!」

「黙れ!!」1人が拳銃を快斗に向けた…続けて残りの2人銃を構えた。

「3対1じゃ勝ち目は無いぞ? 覚悟しな!!」

その言葉と同時に快斗に発砲した。

快斗はKIDの身軽さを利用して銃弾をよけた。

何発か発砲したが快斗には当たらず業を煮やした男の1人が

「チツ、ちよろちよろしやがって!! かまわねえ、先にシエリーを殺れ!!!」

命をつけた男が志保に銃を向けた。

「志保ちゃん!!!!!!」発砲と同時に快斗は志保の上に被さった。

第12話：暗黒再び（後書き）

……組織絡みってやっぱり難しいです。

拳銃？そんなんどう表現していいかわかんねえ（T T）

快「ねえ、ねえ、俺どうなんの？」

新「撃たれるんじゃねえの？」

平「死ぬかも知れへんなあ」

快「そんなあ」

新「線香は任せろ」

平「骨は拾ってやるさかいな」

志「研究解剖…使わせてもらっわ。」

一同「……………一番酷いな」

第13話：幼馴染（前書き）

黒の組織が再び現れた!!

シエリーこと志保を誘拐した。誘拐に気付き後を追った快斗。

男は志保に銃を向けた……そして快斗は……。

第13話：幼馴染

「チツ、ちよろちよろしやがって！！かまわねえ、先にシェリーを殺れ！！！」

命をつけた男が志保に銃を向けた。

「志保ちゃん！！！！」発砲と同時に快斗は志保の上に被さった。

「くっ！！」

快斗は足に銃弾を受けた。そして倒れながらも快斗はKIDの時に使っている銃を構え

発砲した相手の手を狙った。

トランプは狙い通りに相手の手に当たり銃を弾き飛ばした。

「つつ……」男は手を押さえてうずくまった。

（……………来たな……………）快斗は笑みを浮かべた。

「フン。小僧、そこまでだな。一緒に逝かせてやるよ。」

「どうだか？あんた達こそ周りを見たら？」

「なっ、何？」

「動くな！！FBIだ！！」

倉庫の物陰から十数人というFBIが現れ銃を向け周りを固めた。

（…）　　「たく、遅いんだから。でも、志保ちゃんが助かって良かった。」

そうして志保と快斗はFBIに保護された。

「ああ、これ？大丈夫だよ。でも、一週間後の対決はお預けかなあ。」

そういつて笑った。

「そうだな。でも本当に感謝してるよ。志保をかばってくれてありがとな。」

「さすがは名探偵！そこまで分かるなんて。あ、志保ちゃんの様子見てきたら？」

「ああ、そうするよ」新一はワゴンへと向かった。

「ほんまに厄介やな？組織の残党はまだおるんちゃうか？」

「…かなり大きいからね。まだいるかもね。でもこれでFBIも警戒を強めたと思うし新一だって…」

そう言うとワゴンに向かった新一を見つめた。

「そやな。」

平次も新一へと視線を向けた。

ワゴンの中に入ると一番後ろの席に横たわって寝ている志保がいた。

新一は席と席の間に体を割り込ませ志保の側に座ると髪をなで上げた。

（…ごめん。志保。また、守ってやれなかった。側にいてやれなかった。）

志保の目元に唇を落し「情けねえ」と呟いた。

志保は阿笠邸に戻ってもよほど強力だったのだろう、まだ眠りから覚めなかった。

「新一、寝てないじゃろ？志保君はわしがついとるから、大丈夫じゃ。新一は寝たほうがいいぞ？」

博士は食事も取らず、その上睡眠も取らない新一を心配していた。

「じいさんのゆつとおりや。工藤、お前寝たほうがええぞ?」

「新一、志保ちゃんは俺らがちゃんと診てあげるから…。」

新一はふうーと溜め息をつく

「ああ、わかってる…でも、もう二度と志保の側を離れたくねえんだ。こいつになんかあったら

…俺…もう、あんな思いは嫌なんだよ。」と独り言のように呟いた。

「……新一。分かったよ!じゃあ、一度家に帰って風呂にでも入ってきたら?

そんな顔してると起きた時、志保ちゃんも心配するって!ね?」

快斗が新一の背中を押した。

「…快斗。分かった。じゃあ、少しの間志保の事頼むな。」

言葉はそう言っても後ろ髪惹かれる思いで阿笠邸を後にした。

新一は自分の家の前に誰かがいるのに気付いた。

「誰だ?」

新一は組織の残党を意識したが聞こえてくる声に少し胸をなでおろ

した。

「新一？」

「…蘭、どうしたんだ？こんな時間に。もう12時だぞ？」

新一は門の前にいる蘭に声を掛けた。

「う…ん。ごめんね…こんな時間に…でも…新一と話がしたくて…」

蘭は少し俯いて新一に告げた。

「…入れよ。」

新一はそう言うと言を掛けて先に家へと入っていった。

蘭はそのあとをゆっくりと新一の後に続いた。

蘭はリビングのソファに座って俯いていた。

新一はその姿を見て小さく溜め息をつき「珈琲でも入れるから」

とキッチンへと向かった。

新一が珈琲を淹れ蘭の前に置くと蘭は一口だけ口にした。そして

「美味しいね。新一の入れる珈琲って。」と、ふふつと笑った。

新一は自分も珈琲を飲んで「志保直伝だからな」と言葉を返した。

蘭の顔から笑顔が消え二人はしばらく沈黙していた。

「話って何だ？」新一は向かいに座っている蘭にそう切り出した。

「あつ……うん……和葉ちゃんがね、今度大阪に来た時にね……」

「蘭！そんな話がしたくて来たんじゃないんだろ？」

「……」

「俺も蘭に話があるんだ……俺、蘭の事大好きだ。昔からずっと蘭の事好きだった。」

そして離れていた時もずっとだ……」

「し、新一？本当？」

新一の言葉に蘭は顔を上げ新一を見つめた。新一はずっと蘭の顔を見ていた。

「ああ、嘘じゃねーよ。でも……幼馴染としてだ。」

「お……幼馴染？」

「蘭……俺は蘭の事を好きだけど『愛情』の好きじゃない『家族愛』だよ。ごめん。蘭。」

待っててくれ……」

「『かぞくあいい』？…何…よ？それ…何でよ！…どうして？新
一言ったじゃない！」

待つてくれって！嘘でしょ？だって…だってコナン君から聞いた
もん！

死んでも戻ってくるからって！蘭にはまって欲しいんだって！それ
なのにどうして？」

蘭は両手を顔にあて泣き出していた。

「蘭。あの時の言葉は本当なんだ。蘭の元に帰ることが俺の願いだ
つたんだよ。」

「じゃあ、どうして？私は…私は新一のこと…好きなのに…」

「蘭。本当にごめん。でも、俺はもう蘭の側にはいられないんだ。」

「…宮…野さん？」

「えっ？」

「宮野…さんが…いるから？…宮野さんの事…好…き…なの？」

「……………」

「…宮野さんとはどういう関係なの？…どうして知り合ったの？…何で
服部君も知っているの？」

組織って何？残党って！新一！ちゃんと話してよ！」

「…蘭。分かったよ…。…志保は…俺がかかわった事件で知り合った。服部も同じだよ。」

俺たちはある大きな組織を探ってたんだ。その組織はとても凶悪で…お前も知ってるように

FBIのジョーディ先生も追跡するぐらいだ。…志保は…その組織の一員で毒薬を作っていた。」

「えっ？ど、毒薬？じゃ、じゃあ、敵…なの？」

「いや。今はそうじゃない。志保は組織を逃げ出したんだ。そのときに俺らは志保と

出会ったんだ。」

「新一や服部君が追かけるほどの大きな組織の人を新一は好きになったの？」

そんなのおかしいよ！毒薬って何？そんなの犯罪者じゃ…」

「違う！！志保は犯罪者なんかじゃない！あいつは組織に命令されて薬を作っていたが

それを毒薬とは思ってなかったんだ！でもあいつは自分で自分を責めてるんだ。」

今、あいつは一人で戦ってるんだよ。運命から逃げるな…って俺、

あいつに言った…んだ。

その代わりに俺が守ってやるって…。どんなに辛くても、悲しくても志保は1人で頑張ってたんだ。

逃げなかったんだ。俺は志保を守ると約束した。あいつの事好きなんだ。

守ってやりたいと思うんだ。」

「そ…れだけのことで？私だって…新一がいなくて悲しかったよ？辛かったんだよ？」

それなのにどうして後から来たあの人に…。」

「ごめん。蘭の辛さはわかってたよ。泣いてたのも知ってた…。でも、俺は…。」

「どんなに謝られたって、どんなに説明されたって分かんないよ！」

「……蘭。」

「嫌よ！…！絶対に信じない！」

「…蘭。俺はお前の事も大事なんだ。大事な…幼馴染だから…」

「幼馴染が何よ！…！新一の気持ちか…！気持ちが無いならそんなのいらない！…！」

蘭がテーブルを両手で叩くとそのまま顔をつけ泣きじゃくった。

その時…。

「工藤！…！宮野が…」

第13話：幼馴染（後書き）

新「死ななかつたな」

平「そやな。線香代儲けたわ」

志「研究素材が…」

快「へ？…あの…。撃たれたん…ですけど」

新「志保！！大丈夫か？」

平「怪我してへんか？」

志「ええ。」

快「おい」

作「次回は志保に何があつたのか？お楽しみ！！」

快「グレテヤル（怒）」

第14話：存在理由（前書き）

新一の『家族愛』という言葉に納得がいかない蘭。
蘭に新一の気持ちは伝わるのか？

そしてまた新たに平次が…志保はどうなったのか？

…あんまりたいした事にはなってますんm（――）m

第14話：存在理由

「工藤！！宮野が…」

平次がリビングに慌てて入ってきて蘭の状況を見て言葉を止めた。

「服部！志保がどうかしたのか？」

「…ああ… たった今、氣いついたんや。工藤の事よんどる」

「さんきゅ」そう言つと新一は走って出て行つた。

「っ、新一！！！」蘭は新一のあとを追おうとしたが平次に腕を捕まれた。

「？は…とりくん？」

「やめとき。姉ちゃん見ん方がええ。」

「ど…して？服部君、全部知つてたんでしょ？どうして言ってくれなかつたの？どうして？」

パーティーの時も知つてたんでしょ？…二人して笑つてたの？」

「そないなことない！それに工藤が自分の気持ちにきいついたんはパーティーの日や。」

姉ちゃんが工藤と過ごした日はあいつにとつてもメツチャ大事やつてん！

でもな、あいつらが過した時は俺らにも想像できひんぐらい……なんやて。」

「……お願いがあるの。」

「……何や?」

阿笠邸のリビングで哀はソファーに座って珈琲を飲んで声を掛けた。

平次は窓際に立ちその言葉で振り向いた。

コナンは博士と買い物に出掛けていた。

哀はテーブルの上にカプセルが1つ入った小瓶を置いた。

「何やこれ?」

「これを彼に飲ませて欲しいの。私が渡したら……疑って飲みそうも無いから……」

「へ?彼?誰の事や?……工藤か?」

「ええ、お願いね。」

「何や?何の薬や?」

「……………何でもいいでしょ？飲ませる日にちはまた言っわ。」

「っちょ、ちよつと待ってえなあ。何の薬や？」

「…ただの睡眠薬よ。飲めば一日は目が覚めないわ。」

「睡眠薬やて？工藤にそれ飲ますんか？何でや？」

「……………」

「姉ちゃん…何考えとんのや？」

「彼は連れて行かないわ。組織に乗り込むのは私1人で行く。」

「なんやと？そないなことアイツがええてゆうわけないやろ…！」

「…そうね。だからそれを飲ませるのよ。」

「姉ちゃん1人なんて無理やて！！死んでまうで？」

「工藤君は生きてやらないといけないことがあるのよ。多くの人が彼の帰りを待ってるの。」

大丈夫よ。ここのパソコンに解毒剤のデータは送るわ。博士ならそれを見れば…」

「断わるわ。」

「えっ？」

「そないなこと約束できひんわ。工藤に怒られとうないねん。それにや！」

俺は姉ちゃんの考えとる事に賛成できひんしな。一人でなんか行かせへん。死なせへんから。」

「……………でもっ」

「でもやないて。工藤が聞いたら同じことゆうと思うで？」

「私は…あの人の人生を狂わせてしまったわ。組織に乗り込んだら生きて帰れる保障はないわ。」

もちろん、それは貴方も同じ事。もう、誰一人として死なせるわけにはいかないの。」

工藤君は私を守ってくれたわ。今度は私が彼を守りたいの……………命に換えてもね。」

…分かってくれなくてもいいわ。これは私の自己満足でしかないもの。でも…そうしないと私は

此処にいる意味がなくなるの。今、生きている…存在理由が欲しいの。工藤君を必ず元の姿に

戻す。そして彼女の元へ…その為なら私は何でもするわ。それが死に値する事でも。」

「そ、そんな…。服部君も知ってるでしょ？敵なんでしょ？毒薬作ってた人でしょ？」

新一がずっと帰って来れなかったのは彼女のせいなんでしょ？

それなのに…どうして皆で庇うの？博士だって…ジヨディ先生まで…もう…誰も信じられないよ。」

「…宮野をかばつとる訳や無い…。俺は工藤や宮野の味方をするわけや無いけどな…」

姉ちゃんももうわかつとるんじゃないか？工藤の事、ずっと見とったんやろ？」

蘭は平次に何も言わず無言のまま工藤邸を出て行った。

(…ずっと、見てたよ。ずっと想ってきた…。だから…だからどうしていいのか…)

わからないんだよ)

蘭は門を出たところで一度阿笠邸を見上げそして家路に着いた。

「博士！快斗！志保、気が付いたのか？」

新一は服部が呼びに来てすぐに志保の元へと急いだ。

「あつ、新一。今起きたとこだよ。まだ少し朦朧としてるけどね。」

「新一を呼んどったよ。行って来てあげなさい。」新一は二人のいるリビングから

志保の寝室へと階段を下った。

コン コン

新一は志保の寝室の前まで来ると扉をノックして部屋をのぞいた。

「志保？」

新一はベットに近寄りそしてベットの端に腰をかけた。

「く…ど…くん？」志保は朦朧としながらも上半身を起こそうとした。

「志保！無理すんなって！」新一は起き上がる志保を支えて自分の体にもたれ掛けさせた。

「だ、大丈夫…夫よ。」

「話…出来るか？一体何があつたんだ？」

「…買い物から…帰ってきて…チャイムが鳴ったの…迂闊だったわ…チェーンを…」

掛け忘れて…いたのに…ドアを開けちゃった…もの。駄目ね…平和

慣れしてきている…」

そう言うとかスツと笑った。

「何回も言うけど、『平和』でいいんだよ。…ごめんな…志保。またお前を守ってやれなかった…」

側にいてやれなかった。」

「工藤…くんのせいじゃ…ないから。今は…ちゃんと側にいてくれるでしょ？それに

言ったでしょ？『守ってくださいっていう、か弱いお姫様じゃ…ない』って」

「おめえはか弱いお姫様だよ。でもそのお姫様を守る騎士がこれじゃあな。」

そう言うとな新一は目を細め奥歯をかみ締めた。

「私を…狙ったのは組織の生き残り？まだいたなんて…私が居た頃とは規模が違うわね。」

「ああ、多分まだいるだろうな…。でもこれでFBIも強化してくれると思うよ。」

…それに…俺も…もう、志保をこんな目に合わせねえ…」

新一は志保の体を抱きしめた。「ありがとう。」そう志保が小さく呟

いた。

新一は志保を抱きしめていた右手を離すと志保の顎に手をかけそして今度は誰にも邪魔されずに

志保の唇を塞いだ。そして

何度も何度も「愛してる」と囁いた。新一は志保の唇を割って舌を奥へと進めた。

「つんくどくん」

「志保。愛してる。」新一は志保をベットに押し倒してなお唇を塞いでいった。

「ちよーとまつたー！！！！！！！！！！」

またもや聞き覚えのある声に新一は溜め息をついてその相手を睨んだ！

「何だよ?! 快斗!!!」

「駄目じゃーん！新ちゃーん。志保ちゃんはまだ病み上がりなんだよ？レディには優しくしなきゃ！

まったく、人が見てないとすぐ狼になっちゃうんだから！」

そういうと『はい。離れて、離れて』と言って志保と新一の間に割り込んだ。

「新ちゃん言うな！　たく、お前いつまで居るんだ？　怪我してんだから早く帰れよ！」

それに狼って誰の事だよ！」

新一はブツブツと志保から離れると側にあつた椅子に腰掛けた。

「黒羽君…その傷…もしかして…私のせい？」

志保は快斗の足の傷をみた。

「違うよー志保ちゃんのせいなんかじゃないってばー！　俺が油断したんだ。」

「そうや、そうや。黒羽もそろそろ『引退』やな？」

平次がクツクツと笑いながら入ってきた。

「服部！…蘭は？」

「帰ったで。少し一人で考えさせたほうがええやろ。まあ、大丈夫とは思うわ。」

「そつか。わりいな。服部。」

「く、くど…」　志保が言いかけたが…横目で見ていた快斗が

「ねー。聞いて聞いて。傷が治ったら予告状出すんだけどさあ、皆来てくれるよねー？」

「ああ？何処に出すんだよ？」

「今度はね、北海道の小樽の『小樽オルゴール堂』」

『「「オルゴール？？」」「」』

「そうだよ。そこに俺の捜している宝石があるかも…って情報が…」

「やだね！」

「俺もええわ。寒いとこ嫌いやしな」

「なんでー？行こうよー。それで終わったらさー。皆でおいしい物食べようよ」

「快斗は魚ダメだろ？北海道って言ったら…マグロ…イクラ…」

「カニやろ？アナゴに…ウニやな」

「もー！北海道って言ったら…『豚骨ラーメン』でしょ？志保ちゃんもそう思うよね？」

三人の会話を呆然と聞いていた志保はクスツと笑い

「そうねえ、豚骨ラーメンもイクラ、ウニも捨てがたいわね。でも…私は『函館の夜景』かしら？」

『「「「夜景？？」」「」」』

「そうよ。函館ロープウェイを使って上までいくと天気がよければ

すごい綺麗な

景色が見られるのよ。」

「景色…ね。志保も女だなあ。」新一はフツと笑みを浮かべた。

「あら？いけない？別に貴方と行きたいなんて言っていないし？

黒羽君が連れてってくれるんでしょ？」

「…！もーっちろん。志保ちゃんの為なら何処にでも連れてってあげるよー♪」

「てっ、てめー！快斗…！絶対にダメだ！志保と行くのは俺だからなー！」

「なんでー？」

「工藤や黒羽はほつといて宮野ー俺が案内したるか？」

『「平次…！」」「服部…！」』

「こら…！お前たちなんじゃ！志保君はまだ病み上がりなんじゃぞ！静かにするんじゃ！」

いくら待っても来ない博士が新一たちの様子を見に来て志保の周りでギャアギャア騒いでる

3人に湯を入れた。

「また覗いとんか？」

「だーってさ。面白いんだもん♪」

新一が地下室に下りていってから快斗はまた二人を覗き見していた…。

「で？あの子の方はどうだった？」

「かなり取り乱し取ったわ。まあ、しゃあないけどな。」

「そつか…。でも彼女は1人ぼっちじゃないから…何とかなると思うけどね。」

「そやなあ。」

「あっ！！」

「何やねん？」

「新ちゃんつてば（怒）また狼じゃん。」

「またいくんか？」

「もちろん♪」そう言って口元を引き上げた。

（工藤…俺には止められへんわ…堪忍な）平時は苦笑いした。

―その頃―

蘭は探偵事務所に着いていた。

「ただいま…」

小五郎は既に眠っている。出ていったことさえ知らないだろう。

蘭は事務所に入りソファ―に体を預けた。

（どうしたら…いいの？もう…もうどうする事も出来ないの？私は…新一の側には居られないの？

信じたくないよ！！誰か…嘘だと言って…！！…離れたくないよ…こんな事になるなんて…）

蘭の目から落ちる泪がその夜、とまることは無かった…。

第14話：存在理由（後書き）

哀と平次のやり取りはよく分からないですね？

本当はもつと新一とのつながりの深さを表現したかったです。

新「作者！！またあんな所で快斗を引っ張ってきやがって！！」

快「いいじゃん。健全な小説にしなきゃいけないし」

作「そう、そう。」

平「黒羽しか邪魔できる奴おらんしな。」

蘭「次回は私が主役です♪」

快「そうなの？」

作「泥沼劇場…。お楽しみに。」

第15話：独りじゃない（前書き）

新一とはもう元には戻れない…。

蘭の気持ちは？もう新一には届かないのか？

新一と志保と蘭は…。

第15話：独りじゃない

志保がさらわれた事もあって新一と志保はそれから一週間学校を休んだ。

志保の欠席するように勧めたのは博士だった。

新一はどうしても志保のそばを離れたくないからという理由だった。どんなに博士が…志保が学校へ行けといっても頑として聞かなかった。

「志保ちゃん、愛されてるんだよ」新一、まだ子供だもん。しょうがない」

そう言つて快斗は笑った。

「らーん。今日も新一君休みなの？また事件？」

新一の席を眺めていた蘭に園子が隣に来て新一の机に手をおいた。

「う…ん。多分。」

「何？新一君が何で休みなのか知らないの？ここ一週間1人できてただ、

最近、新一君迎えに行ってないの？何で？」

「う…うん。ちょっと。」

「蘭！何かあの日からなんか変だよ？何かあった？新一君に何か言われたの？」

「…！」蘭は一瞬息を飲んだ。

（『愛情』の好きじゃない『家族愛』だよ。）

（俺はもう蘭の側にはいられないんだ。）

（俺は志保を守ると約束した。あいつの事好きなんだ。）

「…ん。ら…ん。…蘭ってば…！」

「え？何、園子？」

「何じゃないわよー急に真剣な顔して黙り込んでうんだもん！本当にどうしちゃったの？」

「何にも無いってばー。新一の事だからまた事件に首突っ込んでるのよ。」

あいつ、大馬鹿推理の助だもん。」

そういうと園子は「そうだよー。あの男にはそれしかないかー。」

そう言つとけらけら笑つた。

（園子。ごめんね。わたし…まだどうしていいか分からないの。今もきつと宮野さんと一緒にいる）

その日の放課後、蘭は1人で帰宅していた。

俯いて…考えても考えても答えは出ない。

納得できない。新一の気持ちはもうないということ…。辛くて、寂しかった日々。

蘭は溜め息を付いてふっと前を見ると…考えていた人がいた。（しん…い…ち）

そしてその横には…。

しばらくその二人を眺めていたら新一の携帯に電話があつたみたいで新一が志保に

何かを話している。

その後志保はふつと微笑んで一言一言新一に告げると新一は笑って走っていった。

（事…件かな？）

その後姿を見送って視線を志保に戻した。

志保は何事も無かったように再び歩き出していた。

蘭は早足で志保に近づいた。

「宮野さん。」

志保はその声の主が誰だかすぐに気付いたようでそれでもいつもと変わらぬ表情で振り向き

「あら、毛利さん。今帰り？」といつもと変わらぬ口調で答えた。

「あの…少し時間…あるかな？」

「ええ、別に問題は無いわ…何処かに入る？」

志保と蘭は少し歩いたところの静かなひっそりとした喫茶店に入
た。

店の中は明るすぎずにしっとりとしたクラシックがかかっている。

客層は高校生や若い年齢は集まっていない。

1人で本を読んでいる25・6歳の女の人。

サラリーマン風の男性が書類に目を通してしている。

「で？何か話があるんじゃないの？」志保はそう言つと注文した珈
琲を手にとつた。

「あつ、その。」蘭は志保の迫力に負けそうになっていた。

何もしていないただ言葉を掛けられただけ…でもその存在が大人っぽくて…何をいつても

敵わない…圧力…言葉にすればそういう感じだ。

志保は珈琲を一口飲むと蘭を真っ直ぐにみて「私のこと…聞きたいんでしょ？」

志保はカップを置いた。

「…新一から少し…聞きました。貴方が…新一の追つてた事件の当事者だ…って。」

「当事者？そうね…そういえばまだ良く聞こえるわね。でも、貴方が言いたいのは違うでしょ？」

犯罪者…って言いたいんじゃないの？」

「どうして…その…組織を裏切ったんですか？」

「…私の知り合いを殺されたのよ。とてもとても大切な人を…ね。」

「こ、殺された？…新一がずっと帰って来れなかったのは貴方の…貴方が作っていた

薬のせいですか？」

「そうよ。私は毒薬を作っていたのよ。」

「毒…薬…。でも新一は毒薬作ってるなんて知らなかったって…」

「ええ、知らなかったわ。騙されて…利用されていたのよ。」

「そ、そんな…」

「そして実験として工藤君にそれを飲ませた。」

「…じつ、実験って…そ…それで新一はどうなったんですか？」

「どうもなっていないわ。それは貴方が良く知ってるんじゃない？
貴方は何度か工藤君を

見たでしょ？動けなくしているのなら貴方の前に彼は現れる事なんてできないでしょ？」

蘭は淡々と話す志保に

「っ、ど、毒薬を作っていてそんな言い方って…！」

「ごめんなさい。でも、それは本当の事でしょう？」

「そ、それはそうですね…じゃあ、何でかえってっこなかったんですか？」

「それは、私たち組織の事を調べていたからよ。貴方には考えられない位の巨大な組織ですもの。」

それに…組織の奴等が貴方が工藤新一にかかわってるって知ったら…貴方の命はなかったわ。

工藤君はそれを恐れていたの…貴方を守るためよ」

「わ…わたしを守る…為？」

「そうよ。工藤君は貴方の事を一番に気にしていたわ。貴方の前に姿を現して事件を解決した事が

何回かあるはずよ。その時。工藤君は前みたいに新聞に載ったかしら？それをしなかったのも

貴方たちを巻き込まないためよ。大阪の探偵さんもその彼女には何も言っていないわよね？

あの人も彼女が大事だからよ。」

「で、でも。私は本当の事が…知りたかった。」

「それは自己満足に過ぎないわ。工藤君の全てが知りたいていうのは彼女としては

当然の想い…よね。でもそれは彼には迷惑にしか思えないわ。貴方を守りたかったって

言う思いがどうしてもわからないの？」

「そ、そんなこと貴方には言われたくないです！理由はともかく毒

薬なんて…殺人者…あつ…その。」

「そうね。確かに私は組織の一員で毒薬を作っていたわ。知らなかったとはいえ…」

それは償いたくても償え切れないこと…。私の居るべき場所にはここにはないのよ…

ここには本当はいられない。貴方達には償い切れないほど酷い事をしたわ。

恨んでくれた方が…楽…なのに。」

最後の言葉は私に言ってる言葉じゃない…。蘭は新一の顔が横切った。

「わ、わたし…新一の…事、好きなんです。ずっと昔から…。ずっと好きで…ずっと帰ってくるの

待ってたんです。」

「…知ってるわ。貴方の事ですごく苦しんだもの…彼。」

「そ、それで…宮野さんは…宮野さんは新一の事どう思ってるんですか？」

「……………」

「新一に言われました…宮…」志保を守ると約束した。あいつの事好きなんだ』って。宮野さんは

どうなんですか？」

「……………」

「私、納得いきません。私はずっと新一のこと好きで…待ってたのに…それなのに…それなのに後から現れた

人…にしかも…そんな…貴方みたいな人に…」

（私が…私が居る事で皆に迷惑がかかってる…彼女は何も関係ない人…。

私はやっぱり幸せになっていけない…何でこんな事を今まで分からなかったんだろう？

…わかっていたけど…幸せすぎて…甘えていたのね…残党に捕まった時も…前の私なら…

感じたはず。あのせいで彼女が不安になり、黒羽君も服部君もジョーディ先生まで…再び巻き込んだ。

そして…工藤君も。）

志保は真っ直ぐに蘭を見つめた。

「私は、工藤君のこと何とも思っていないわ。私はお隣同士として関ってきていたつもりだけど。

貴方がそれを不快を感じていたのならごめんなさい。工藤君が貴方

に言った言葉もきつと、勘違いよ。」

「…かん…ちがい？」

「そうよ。私は大切な人を組織に殺された…私の身近に身内は居ないわ。遠い親戚で博士だけ。」

高校に入っても勿論知っている人は居ないわ。それを工藤君が私を面倒見ていくうちにそう、

錯覚しちゃったのよ。独りでいるから…守らなくちゃ…ってね。

彼は誰にでも優しい、そうじゃなくて？」

「……」

「貴方は心配しなくても彼はちゃんと思ひ出すわ。自分のしなくてはいけない事を…ね。」

そう言つて席を立つと自分の分の珈琲代をテーブルにおいて出口に向かおうとした。

「本当に…」

「え？」

「あ、あの。本当に宮野さんはそう思っているんですか？」

蘭は席を立ち志保のほうを振り返った。

「……………」

「新一は誰にでも優しい…。そうかもしれないけど…仮にも貴方は犯罪者で…新一の敵だった人で…」

それでも、新一が貴方に惹かれたのは…優しいからだけじゃなく…本当に宮野さんの事を

想っていて…守ってあげたくて…だから…」

「私は彼の事…好きじゃないから」

志保はそう微笑むとさよならといって出て行った。

蘭は席に着くとふうと溜め息をついた。

（宮野さん…嘘ついてるね？本当は新一のこと好きなんだ。惹かれてるんだ。）

新一がいなくなってから宮野さんと知り合って…私が新一と過ごしてきた時間よりは短いけど…

その時間とは比べ物にならない時を過してきたんだね。お互いがいなければならぬ存在…。

お互いが分かりあってる。……敵わないなあ。）

蘭は1人笑みを浮かべた。

ピリリ　ピリリ

制服のポケットに入れていた携帯が鳴った。

携帯を取り出すと園子からのメールが届いていた。

『蘭、何があつたかは知らないけど、絶対に1人で悩んだりしないでね。蘭は独りじゃないよ。』

私は何時でも蘭の味方だからね。出来る事は何でもするよ、蘭の辛い顔は見たくないから。

何時でも蘭の側にいるからね。XXX園子』

蘭はメールを見て携帯を握り締め涙を流した。

（ゴメンネ。ゴメンネ。園子。ありがとう。もう十分に園子には力を貰ってるよ。）

蘭は携帯のメモリーから番号を選んだ。

「どうした？急に？」

今までいた喫茶店に入ってきたのは新一だった。

「ごめんねー。事件だった？」

「いや。もう終わったところだったから…誰かいたのか？園子か？」

新一は蘭の向かえにまだ片付けられていない珈琲カップを見つけた。

「うん。さっきまでね。宮野さんが。」

「えっ？志保？何で…？蘭と志保が喫茶店で？」

「あら？いけないー？宮野さんとお茶したら？」

「別に、いけなくなかんねえーけど？何はなしたんだ？」

「へー。やっぱり気になる？」

「別に…。」

「私ね…まだ新一の事好きなんだ。」

「…蘭。俺は…」

「あの日、新一に言われた事がどうしても納得いなくてさ。それで宮野さんに色々聞いたの。」

「…っ、聞いたって…何を？お前、志保になんか言っただんじゃ？」

「最初はね…悔しくって…新一の言っただ事納得いかなかったから…

ひどい事言っちゃったかもしれない…でも。話してみて分かったの。宮野さんって悲しい人ね。

すごく淡々と自分で自分のこと酷く言うの。新一の事とても大事に想ってる…よね。

ねえ、新一。宮野さんの事…守ってあげてね…。宮野さんと話すまでは…ね。自分が一番新一の

近くにいる…いられる存在って思ってたの…だって…ずっと一緒にいたし、いつも守ってくれたし…

でも、私が新一と過ごした時間は宮野さんより長い時間だったけど…時間より内容…って言うのかな？

敵わないって分かったの！！ほんの少ししか話してないの何でって思いかもしれないけど…

私にはわかったの。…だって、私も新一のこと好きだったもん。」

「…蘭…」

「新一に言われてからの一週間、すごく辛くて考えても考えても答えが出なくて本当に

どうしていいか分からないくらい落ち込んだの…でも今はすっごくスッキリしてる！

宮野さんと話せてよかった…それに…ね。私は独りじゃないから。」

「……………」

「見て？園子からのメールだよ？私、感動しちゃった。何も言わなかったし…何の相談もしなかったのに

園子はね、ちゃんと私を見ててくれたの。独りじゃないよっていつてくれたの。私には園子もいる。

けど…宮野さんは…独りでしょ？」

「園子は蘭の『一生の友達』だろ？」

「新一…。そうよ。」蘭は涙目で頷いた。

「そうそう。宮野さんね、新一の事好きじゃないって言ってたよ？」

「…え？」

「動揺してるー？」蘭は悪戯にぶつと笑うと

「でも、嘘ってすぐわかった。きっと私の事を思ってたんだよ…。宮野さん…優しいね。」

「…ああ」

「新一。宮野さん守ってあげてね。」

「ああ、分かってる。蘭…本当にごめんな。」

「ううん。私は大丈夫。それに新一とこれっきりじゃないでしょ？これから幼馴染でしょ？」

新一より格好良い人見つけるもん。推理馬鹿じゃない人ね。」

「推理馬鹿ってなんだよ？」

そう言つて二人は同時に吹き出した。

R R R R R R R R R R

「はい？工藤…つて博士か？どうかした…？」

博士からの電話に新一の顔から笑顔が消えていった。

「ああ、分かった…いや、まだしないほうがいいな…とにかくすぐに帰るから…それじゃ！」

新一は電話を切ると急いで席を立った。

「？新一。どうしたの？また事件でも？」

蘭も新一にそう聞くと

「……志保が…いなくなった。」

「ええ？宮野さんが？…そ、それって…また組織の人たちに？」

「いや…まだわからない。とにかく…また連絡すつから！」

そついうとテーブルの上の伝票に手を伸ばした。

「あつ、新一。私がやっておくから早く帰つてあげて！」

「…蘭。わりいな。また埋め合わせすつから」

そう言つと慌てて店から出て行つた。

第15話：独りじゃない（後書き）

蘭「私って…可哀相ね？」

園「蘭！！私がついてるから！！」

作「女の友情…の物語…？」

蘭「私も誰かとラブラブにしてよ！！作者！！」

作「じゃあ、園子は？」

次回楽しみに

第16話：ただいま（前書き）

志保が再び居なくなつた！！

また黒の組織の手に？それとも新たな事件が…？

第16話：ただいま

「博士！！！！」

阿笠邸に新一は慌てて入ってきた。

「おお、新一！！待っておったよ！」

「どういう事だ？志保がいなくなっただつて。」

「志保君は2時間ほど前に帰ってきたんじゃ、その後わしが1時間ほど出かけていたんじゃが…」

帰ってきたら志保君がいなくなっていて研究室も寝室も見たんじゃが…もしかして

…組織の奴等がまた志保君を？」

新一は顎に手をかけ部屋を見渡しながら

「いや、それはないな。部屋は荒らされてないし志保も組織の残党がいると気付いてからは

警戒を高めていた。簡単にさらわれたりしないさ。」

新一は地下への階段をおりて志保の寝室へと向かった。

ドアをあけ中へ入るとベットのの上に紙切れが…。

博士へ

今までありがとう。

そしてごめんなさい。

たった3行の手紙を見た瞬間新一は阿笠邸から飛び出した。

後ろで博士の呼ぶ声が聞こえた。

（いねえ！何処いったんだ？あいつの事だ…自分の足跡を残すような事はしねえだろうから…）

電車やバスはないはずなのに……タクシー……か？）

駅で聞き込みをするが一切情報は手に入らない。

（あいつが行きそうなところってどこだ？出て行ってから約3時間……か。）

帝丹小学校…帝丹高校…屋上…河川敷…公園…新一は思い付く場所を虱潰しに探した。

（灰戸シティーホテル?!）

志保の姿はなかった。

「新一!!」

「工藤!!」

「快斗…服部…どうして？」

「…じいさんから電話もろつてな。宮野おらんようになったて？」

「ああ、あいつの行きそうな所探してんだけど…」

「新一!何処か二人で行ったところとかないの?思い出の場所とか?」

「さつきから考えてるけど…俺…あいつの事…何にも分かってなかった…」

「初めておーた所とか…何かないんか？」

「…初めて？」

（初めて会ったのは…小学校…初めて?灰原と会ったのは…。宮野として…は。

コナンの時…コナンの…工藤新一の………！！！！）

新一は何かを思い出したかのように走り出した。

「お、おいっ！工藤！！何やねん？あいつ」

「………平次。新一に任せとけば大丈夫だよ。きっと。」

「…そやな。ほな、行くか？」

「うん。きっと心配してるよ」

二人はゆっくりと歩き出した。

（…ここで…ここから全てが…始まったのね）

志保はある場所で佇んでいた。

「そう。ここから…始まったんだ。江戸川コナンは…」

「?!」

振り向くとそこには新一が立っていた。

「……………くん。ど…うして。」

新一は志保の前に立ち周りを見渡した。そして指を指し笑った。

「あそこでウオツカを見ていて…そしてジンに殴られたんだ。で…この辺に倒れたんだ。」

情けねえよな。気配に気付かなかったなんてな。あん時警察から逃げて帰る時犬にも

追っかけられて大変だったんだぞ。」

「…どう…して?」

「え?」

「どうしてそんなこと笑って言えるの?!」

「どうしてって…事実だし。もう終わった事だからだよ。」

「終わった事にしないで!!笑ったりしないでよ!!」

「志保?」

「…お願い…だから…恨んで、憎んで…よ。じゃないと…私…」

「…憎んだり、恨んだりする必要ねえだろ?」

「ダメ！！絶対にダメよ！！」

「……………志保。」

「……………私と……………」

「え？」

「私と一番最初に逢ったときのこと覚えてる？」

「？ああ。広田教授が殺害された時の事か？」

「ええ、その頃の貴方は……………間違いなく私を憎んでたわよね？」

「っ、……………志保。」

「憎んでたでしょ？私の事恨んだでしょ？工藤君！！」

「……………ああ、あの時は……………な。」

「……………それなら……………あの頃の気持ちに戻って……………！！……………お……………願……………い……………」

「……………無理だよ。あの頃とは違う。」

「何が違うの？何も変わらないわ！！私は……………犯罪者でしょ？裏切り者よ？何も変わってな……………」

「志保。……………違うんだよ。あの頃とは違うんだ。志保は犯罪者じゃねえし、裏切り者のシェリーも」

居ないんだ…それに一番変わったのは…俺の気持ちだ…志保のこ
とを愛してるから…な。」

志保は両手で顔を覆いしやがみ込んだ。

新一は呆れたようにふうと溜め息をつき志保の隣に座った。

「なあ、志保。さっきの『終わった事にしないで!!』ってさ

…終わった事だけど、忘れちゃいねえーよ。」

志保は新一の言葉に顔を上げた。

「薬を飲まされ幼児化した。江戸川コナンはここから始まって俺は
お前に会った。そして組織を

壊滅させてジンも死んだ…。事実だよな。ついでに言うと…工藤新
一も今、ここにいます。」

夢物語なんかじゃねえ。だけど、その事で憎んで、恨むべき相手は
志保、お前じゃねーから。

…と、いつでももう奴等はいないんだ。下っ端の残党はまだいるみ
たいけどな。

それに…コナンになって…良かったよ。」

「?!良か…った?」

「ああ、自分がどれだけ無力かがわかったし…」

「無力…っていうのはそれは体が小学生だったからで…」

「確かに、小学生だからってのもあったけど…コナンになる前は…
工藤新一の時は…高校生探偵と

言われた。出来ない事なんてないって思ってた。解決できない事件
は無いってな。」

「でも、江戸川君のときも解決させていたわ。」

「コナンになってから…なる前もだけど、どれだけの人が死んでい
ったのかな？」

犯人を推理で追い詰めて死なせるなんて事は絶対にしねえ。でも、
事件が起きる度に人が

死んでいく。それを俺は止められねえ。止める事が出来ないでいた。

「

「それはどうしようもない事でしょ？」

新一はふつと苦笑いをして

「大阪でな、ある事件があったんだ。服部も一緒だったよ。殺人事
件が起きたんだ…」

服部と俺は捜査を開始していた…でもその後第二の殺人が起きたん
だ。止める事が出来なかった。

服部の親父が言ってたよ『警察が周りを固めてるから大事は起こらんやろうと

高括ってた証拠や』ってな。あの時殴られたのは服部だったが…コナンじゃなく

新一の姿だったら一緒に殴られてたかもな。他にもな…福井の美國島って所でも事件が

あったんだ…そこでもまた…。高校生探偵つてもてはやされ過ぎていたんだ。

きつと…コナンじゃないとわかんなかったよ。

…それに…それに…明美さんだって…守れなかった。」

「お…姉ちゃん？」

「ああ…もつと早く俺が気付いていれば…間に合ったかもしれない。コナンになってからは

1人の力じゃ何も出来なかった…。犯人を追跡したり倒したり出来たのは博士の発明のおかげだ。

推理ショーも毛利のおっちゃんがいなくちゃ出来なかった。体が小さくなったただけであって

推理することが新一の時と違うわけじゃない。それでも被害者が次々と出てくるって事は

俺が無力だつて事だ。自意識過剰していたつて事だよ。なさけねえな。」

「…工藤君。」

「ま、だからだ！コナンになって全てが悪いわけじゃ無かつたつてことだ。」

「……………」

「志保。帰ろう。」

新一はそう言つと立ち上がり志保に向かって手を伸ばした。

「…でも…やっぱり帰れない。私はあそこには帰れないわ。」

「どうして？」

「……………」

「もしかして、蘭の事気にしてるのか？…今日、会つたんだろ？」

「……………ええ。貴方と別れた後に…。」

「その後に…蘭から電話で呼び出されたんだよ。…それで、お前との事聞いた。」

「あの人、貴方の事…好きなのよ？貴方ももう一度考えて…あの頃の気持ちを…。」

「考えたさ…考えて、志保が好きだと思った。志保のそばを離れないよ。」

「でも、彼女は…!」

「蘭は、もうわかってくれたよ。『守ってあげて』って言うてくれたよ。だから…」

「うそ!だって…」

R R R R R R R R R R R

新一の携帯がなって志保の言葉が遮られた。

「はい? ああ、蘭」

「!」

志保は新一の言葉を聞いて立ち上がり新一に背を向けた。

「…ああ、見つかったよ…うん…」

新一は携帯を志保の耳に当てた。

「…いち!! 新一! きいてる? 宮野さん、無事なの? ねえ、新一ってばー聞いている?」

新一はもう一度自分の耳に携帯を戻し

「ああ、大丈夫。無事だし、組織絡みじゃないから」

「ほんと？良かった！。今何処にいるの？早く帰ってきなさいよ。
宮野さんに

私謝らなきゃいけないから。宮野さんが出て行くことなんて無いって！新一！

ちゃんと宮野さんの事守ってあげなきゃダメだからね！！」

「……………」

「志保？聞こえてる？蘭も心配してるよ。もう、誰もお前を責めたり、恨んだりしてないから。」

新一は蘭の通話を聞こえるように志保に向けていた。

受話器の向こうからは反応のない新一に蘭が怒っている声が聞こえていた。

「わりいな。蘭。もう大丈夫だから。またな…ああ、じゃあな。」

そう言うと蘭との電話を切った。

「志保。帰ろう」

そう言うと志保を後ろから抱きしめた。

「一緒に帰ろう。」

志保は泣いて頷くだけだった。

「遅いなあ、あいつら何してんねん？」

「大丈夫じゃろうか？ やっぱりわしらも行った方がよかつたんじゃ…」

「大丈夫だよー！ もうすぐ帰ってくるって！！ 新一ならきつとね。」

博士と、平次、快斗は阿笠邸の門の前で志保達を待っていた。

平次は門の前にしゃがみ込んで…。

博士は落ち着かないで門の前を行ったり来たりを繰り返していた。

快斗は門に体を預けて立っていた。

「あつ！ 帰ってきたみたいだよ。」

快斗の言葉に二人は一齐に指を指した方向を見た。

志保は新一の家の前を通り過ぎた時に阿笠邸の前に人影を見つけて立ち止まった。

「…博士…服部君…黒羽…君も？」

志保の言葉に新一は

「志保を待ってたんだ。」

そう言つと志保の背中を押して歩みを進めた。

そして、門の前まで行くと

「志保ちゃん、おつかえりー。待ってたんだよ？」

とまるで尻尾を振っている犬のように満円の笑みを見せた快斗。

「遅かったな？何処で遊んできたんや？」

そう言つて照れながら指で鼻をこする平次。

「志保君、お帰り。もう腹ペコじゃよ。」

お腹をさすりいつもの笑顔を見せた博士。

志保は口を手で押さえ「…心配…かけて…ごめん…なさい。」

と消えそうな声で呟き泪を見せた。

新一は志保の脇を通り過ぎ、博士達の横に立ち志保に向かって手を伸ばし声を掛けた。

「志保。お帰り。」と。

志保はその言葉に対し更に涙を流して新一の手を取った。

そして……………柔らかな笑顔で答えた。

「
た
だ
い
ま。
」

第16話：ただいま（後書き）

作「エーン（> <）」

平「どないしてん？作者が泣いとんで？」

新「最終話だからじゃねーのか？」

快「まだ最終話じゃないみたいだよ？」

平「ほんなら何でや？」

作「……………毎日の投稿更新が…出来なかったから……」

一同「……………（・・・;）」

作「では、気を取り直して……」

やっとここまでたどり着きました。題名の『ただいま』を最後の『ただいま』で……と言う事でした。

このシーンは初めから決めていたので書くことが出来てよかったです。

しかもこの話を最終にしようかと思ったのですが……欲が出たのでもう少し続きます。

えーっと、次回の内容は……楽しみに（^^）v」

第17話：幸せ…（前書き）

5年後のお話です。

- ・ 工藤優作 & 有希子はロスから帰省中。
 - ・ 快斗 & 平次は工藤邸に居候中？
- つて感じを前提に……。

第17話：幸せ…

工藤邸リビングの一角で平次と新一は…。

「ーちゆうことやる？そないなると犯人は……」

「ああ、そつだ。犯人は奥さんの真木子さんだ。」

殺人事件の調書を開いていた。

「ちよつと！！新ちゃん！平次君！こんな時にそんな物見てないで手伝ってちょうだい！！」

「そつだよ。折角のパーティーなのにさ。そんなの広げてさ。」

「しょうがねえだろ？目暮警部からの依頼なんだから。こつちも探偵調査で忙しくて中々目を通せなかったんだから。」

「そつや、そつや。まあ、忙しゅうても俺らが解決出来へん事件なんてないけどな。なあ？工藤。」

「バー口。忙しくしてんのは誰のせいだよ？服部がスケジュールも見ねえでポンポン依頼引き受けたりするっからだろ？」

「まあ、ええやんか。お陰で工藤探偵事務所は大繁盛やんけ？」

「誰が大繁盛させろって言ったんだよ？」新一はジト目で平次を睨んだ。

「そう言えばサー。どうして『工藤探偵事務所』なの？平次の名前ないじゃん？」

あれから5年。新一たちは23歳になっていた。

20歳になってから新一と平次は一緒に探偵事務所を設立した。

快斗は2年前に念願の宝石を手に入れ全ての謎を解き、KIDに幕を下ろした。

今では世界中を飛び回るマジシャンとして活躍していた。

「名前なんて関係あらへんて俺は工藤と一緒に仕事が出来ればええんやからな。」

「へえ。新一愛されてるのね？俺も新ちゃんLOVEだけど」

「うつせー。何だよ『LOVE』って！それに快斗！！新ちゃんて呼ぶんじゃねー！！」

「もー、いつまで遊んでるのよ？もう準備できたから皆を呼んできて！！」

先程からキャンキャンわめいているのは有希子…であった。

「快斗君だけよ、ちゃんと手伝ってくれてるのは！！ああ、そうそう。平次君は書斎から」

優作呼んできてくれる？新ちゃんは2人をお庭から呼んで来て！！」

「わかったよ。まったく、いつまでたってもうるさいオバサ…」

「ん?!新ちゃん?今何か言ったかしら?」有希子の鋭い視線が新一を突き刺した。

「いつ、いや。何にも。ちょっと呼んでくるよ。(いつまで若いつもりだよ?まったく。)」

新一はリビングから庭に出れるドアをあけると庭先で遊んでいる二人に目を向けた。

工藤邸の庭には優作が『誕生祝だ』と言って滑り台…ブランコ…鉄棒などが設置されていた。

そうして小さい公園が工藤邸の庭に出現した。

「優希!!蘭!!準備が出来たから戻ってこい!!」新一は滑り台で遊んでいる二人に声を掛けた。

「はい。」そう新一に声を掛けたのは毛利蘭。今では苗字が毛利ではない…が。

「パパが呼んでるからいこう。」

そう言っ—一緒に遊んでる女の子に声を掛けた。

「うん。」元気いっぱい返事したのは工藤優希(5歳)…モチロン新一の子供。

新一はその2人を見て目を細め微笑んだ。

「『仲のいい親子』」新一の横に立ち声を掛けた。

「『仲のいい親子』か。」

「ええ、そう見えない？絵の中から飛び出てきたって感じの穏やかな画像だと思うけど？」

「…そうだな。蘭は現役保母さんだから子供の扱いには慣れてるしな……………他人が見たら親子だろうな…髪が…」

「おとうさん！！！」

新一の言葉を遮り、一生懸命に走り新一に屈託のない笑顔をみせ抱きついてきた。

「優希！楽しかったか？」

そう言うと優希を抱き上げ目元に軽くキスをした。

「とってもたのしかったわ。ゆうきはすべりだいもぶらんこもだいすきなもの。」

「新一ったら、目尻下がrippぱなしじゃない。」蘭はクスクスと笑った。

「蘭さん。ごめんなさいね。迷惑掛けてしまつて。」志保が小さく頭を下げると

「私、子供大好きだから。全然平気よ。それに志保さんは大事にしないといけないじゃない？」

えーっと…何ヶ月でしたっけ？」

「4ヶ月よ。もう安定期に入ったから…」志保は少し膨らんだお腹を触った。

「そっかあ、早いものね。あつ、そうそう。そういえば何で『おとうさん』なの？『パパ』とか呼ばせてると思った。」

蘭の疑問に

「だろ？俺は『パパ・ママ』が良かったのに…志保が…」そう言つて志保をジト目で見ると

「ダメよ。今からそんな呼び方をしたら小学校に入っても直らないでしょ？」

「そんな気にすることかなあ？」新一は少しパパ気分を味わいたかったみたいで落ち込んだ。

「おかあさん。きょうはゆうきのおたんじょうびかいでしょ？ゆうきのすきなイチゴのケーキはある？」

志保と同じ赤見がかった茶色の髪を靡かせた優希が目を輝かせていた。

「ええ、あるわよ。優希の大好きな快斗お兄ちゃんが作ってくれてるわ。だから早く手を洗ってきなさい。」

そういうと志保は新一の腕から優希を抱き上げ下に降ろした。

「はい。わかりました。」優希は駆け足でバスルームへと姿を消した。

「志保さんそっくりね？しかも5歳とは思えない位にしっかりしてるわ。」蘭は少し驚き呟いた。

「しっかりし過ぎてるぜ。5歳なのに志保はもう優希に研究の手伝いさせてるんだぜ？」

呆れた口調で志保を見ると

「あら？手伝いなんかさせてないわよ。優希が『やりたい』って言うて勝手に研究室に入ってくるのよ？」

「けどなあー。」そう言うて新一は口をとがらせた。

「貴方はどうなの？工藤君！優希を殺人現場なんか連れて行ったりしないでくれる？」

「ええー！！新一そんなところに優希ちゃん連れてつてるの？」

「いつ、いや…それは…何かと勉強に…なるかと…」

新一は両手を胸の前で広げて懸命に言い訳をしていた。

「勉強？冗談じゃないわ！優希を貴方みたいに推理オタクなんかにしたくないわ。」

「はあ？誰が推理オタクだよ？」

「じゃあ、推理の勉強をさせて探偵にでもするつもりかしら？それとも何？」

血生臭い事件現場を見せて貴方のお父様みたいに推理小説家？」

「あ、ちょ、ちょっと…2人とも…」蘭は2人を止めようとした。

「蘭君。ほっときなさい。いつもの事じゃから。」

「…阿笠博士。で、でも…」

「それにじゃ！もうすぐ止めにくるから大丈夫じゃよ！！」そう言う
うと片目を閉じてウインクをした。

「志保！！俺は別に…」新一は志保に反撃しようとした時…。

「おとうさん！！もうやめなさい。どうせおかあさんにまけちゃう
んだから。」

そう言つてバスルームから帰ってきた優希が新一の側に歩み寄つた。

「優希…。」そう言つと再び優希を抱き上げた。

「おとうさんは、おかあさんにかつたことないでしょ？それにおか
あさんをおこらせたら

こんどはおなかのいたくなるおくすりだけじゃすまないよ？」

そういつてニコツと笑った。

「え？お腹の痛くなる薬？」蘭は目を丸めて新一と志保を交互に見つめた。

「…だから、志保を怒らせると…怖いんだ」新一はそう言うつと肩をすくめた。

「おお、そんな事より！！蘭君！！時間はいいのか？旦那さんと食事に行くと言つておつたろ？」

阿笠博士が腕時計を見ながら蘭に近づくと

「ええ？！！いつけない、もうこんな時間？私行かなきゃ！」

蘭は自分の時計を見て帰り支度を始めた。

「今日は、ありがとな。優希の面倒見てくれて助かったよ」新一は優希を下に降ろすと蘭のカバンを手渡した。

「うっん。優希ちゃんの誕生日会には出席できなかったけど優希ちゃんの顔も見れたしね。

じゃあ、志保さんもあまり無理しないでね？2人目だからって侮つてはダメよ？」

そう言うつと工藤邸を後にした。

「確か…大学の先輩…だったわよね？蘭さんの旦那さんって」志保

は優希を抱き上げた。

「ああ、まだ半年しか経ってねえから新婚だな。」

「少し…後悔？」そう言っていると志保は少しだけ口元を上げた。

「ばーか。そんなこと思うわけねえだろ？」そう言っていると志保の頬にキスを落とした。

「さてっ…と、優希の誕生日会でも始めるか！」

「そうね。その前に！！工藤君は手を洗ってこなくてはダメよ？」

新一ははいはいと言って苦笑いしながらバスルームへ向かった。

「はい、ケーキ出来たよー。快斗君お手製のイチゴケーキ！！」
エプロン姿の快斗がキッチンから現れた。

「うわあ、かいとがつくつたの？おいしそう。これはゆづきのためのケーキ？」

優希がテーブルに置かれたケーキを見て手を叩いた。

「そうだよ。このケーキは優希の為に作ったんだよ。ぜーんぶ食べていいんだよ。」

快斗が優希の横に座り笑顔を向けた。

「本当に快斗君は料理が上手いわね。お手伝いもしてくれるし、気

が利くし！！誰かさんとは大違いね？」

有希子はバスルームから戻ってきた新一を見た。

「ああ？俺の事か？気が利かなくて悪かったな。それと…快斗！！
テメエ、

俺の優希に色目使ってんじゃねえ、離れろ！！」

新一は優希を快斗から離し睨んだ。

「えーっ、色目なんか使ってないじゃん？もー新一ったら過保護なんだから！優希がお嫁に行く時どうすんのさ？」

快斗は手を腰にあて頬を膨らませた。

「バー口。優希はずっと俺の側にいるんだよ！結婚なんてさせねえもん。それにテメエはただでさえ俺に

似てんのに優希にその顔を見せんじゃねえ！優希が俺に似てるお前を好きになっただろうすんだ？」

「そやなあ、工藤と黒羽はよう似とるからなあ、『お父さんと似てる快斗と結婚するの』つかかもしれへんしな」

そう言うとお変やなと新一の肩を叩いた…が……

「ゆうきはおとうさんとかいとはまちがわないよ。ぜんぶおとうさんとおなじじゃないじゃない」

優希の一言に快斗は動きを止めた。

（え？『おとうさんとかいとはまちがわないよ』それって……）

（『全然似てない…』とは言い切れないけど…私は…間違えたりしないから』）

（やっぱり志保ちゃんの子供だね。）快斗はクスツと笑った…。

（その言葉は…俺にとっては最高の褒め言葉…。親子2代…助けられたよ…）

「ほんでも優希は黒羽が好きなんやろ？」

「うん、かいとのことは好きだよ。でもへいじも好きよ。」

「ほな、優希は俺と結婚すんやな？」

「ばつ、何言つてやがる！お前なんかとも結婚なんてさせるか！」

新一は優希の横に座り抱き寄せた。

「もう…！ゆうきはへいじともかいともけっこんなんてしないわよ。だってゆうきはすきなひといるもの。」

「へ？優希好きな子いるのか？」新一は目を点にさせ優希を見つめた。

「うん。でもかたおもいつてゆーんだけどね。」

「ゆっ、優希。それ誰だ？お父さんの知ってる子か？」

「なーいしょ」そう言つとソファから立ち上がり志保の元へ走つていった。

その後、新一が落ち込んだ事は明らかであつた。

「寝たのか？」工藤邸2階にある寢室を覗いた。

「ええ、よほど疲れたのね。いつもより早く寝ちゃったわ。」

志保は優希の寝ているベットの脇のライトを消し部屋のドアをそつと閉めた。

志保はリビングに下りて珈琲を入れ新一に手渡した。

「さんきゅ」

新一はソファに座り志保から受け取つた珈琲に口をつけた。

「…もう5年か…早いな。」

「そうね。」志保も新一の隣に腰掛け頷いた。

「平和だよな。っても事件は絶え間なく起こってるからそうとも言えねえけどな。」

「そうね。でも…平和だね。それに…」

「それに？」新一は志保のほうに体を向け言葉をまっただ。

「それに…幸せだね。貴方がいて…優希もいる。そしてここにも…」

そう言うとお腹を優しくなでた。

「俺もだよ。服部と始めた仕事も順調だし、志保も優希も側に居るからな。」

新一は志保のお腹に手をおいた。

「どうかしたの？元氣ないじゃない。……もしかして、優希が昼間言った事気にしてるの？」

そう言うとお腹を笑った。

「バツ、バー口。そんなじゃねえよ。」

「本当に親バカね？優希はまだ5歳じゃないの。そんな事で動揺してたら探偵職は廃業ね？」

「だって、優希に好きなやつだぜ？志保は誰か聞いてないのか？快斗や服部じゃないんだろ？」

じゃあ誰だよ？ソファーに体を静めた新一は苦笑いした。

「ゆっ、優希。それ誰だ？お父さんの知ってる子か？」

「なーいしょ。」そう言つとソファーから立ち上がり志保の元へ走つていった。

「おかあさん。ちょっとおみかして」優希は志保に駆け寄り小声で話し始めた。

「ゆうきのだいすきなひとはおとうさんなの。でもおかあさんもおとうさんがだいすきでしょ？」

だからおかあさんとゆうきはライバルなのよ。これはおとうさんにはひみつよ。」

そう言つてニッコリと笑つた。

「……ほ。しほ。おーい。志保？」

「え？何？」

「だーから、お前誰かしてんのかよ？優希の好きな奴！！」

「さあ、誰かしらね？意外と身近にいるのかもね。」

「身近？幼稚園の友達か？」新一は頭を抱えた。

「バカね。今からそんな事考えてたら優希が結婚するときどうするのよ？」

「ヤダ！！優希に結婚させねーもん。」

志保は溜め息をついて言葉を続けた。

「優希を結婚させないの？優希にも私達の気持ちを分かってもらいたくない？」

「??」新一は志保の言葉に顔を上げると志保は微笑み

「結婚するだけが幸せとは言わないけど…好きな人と一緒になってその人の子供を生んで

一生を共にすごしたい。幸せを分けてあげたいわ。」

そう言って目を伏せお腹に手をおきこの子にもね。と呟いた。

「…そうだな。」

新一は志保を抱きしめ、それでも小さく溜め息をつき

「でも…気になる…優希の好きな奴」と呟いた。

「あなたたち、なにしてるの？」

「……！！！」

「おへやにはいないの？」先程寝たと思われた優希がリビングのドアの前で平次と快斗に声を掛けた。

「あ、あれ？優希寝たんじゃなかったの？」快斗の声が裏返る。

「うん。のどがかわいたからおみずのみにきたの。かいとたちはなにしてるの？」

「あ、あのね。俺たちも水飲みに来たんだよ、ねえ？平次！！」

快斗は平次の腕も肘で突つついた。

「お、おう、そうやでー。誰も工藤たちを覗き見なんてしてへんよ。」

「……………へえ。」優希の冷たい視線が快斗に突き刺さった。

「そ、そや、優希は好きな子がおるつちゅうてたやろ？俺らの知ってるやつか？」

「それって、新一の事でしょ？」

「そうよ。やつぱりかいとはすごいのね。でもおとうさんにはないしよだからね。へいじもかいともすきだけど

おとうさんにはまだまだよ。」

「まだお父さんには敵わないって？」快斗は苦笑いした。

「そうよ。へいじはとてもやさしいし、たいりよくもあるけど、すいりにかんしてはまだまだあらがみえる。

かいとはすいりよくやひとのきもちをよみとるのはすごいけど、じぶんのからをもってる。

まだじぶんのあんしんできるばしよをさがしてる…だからふたりとはまだけっこんできないわ。」

「は、はは、推理は工藤より下やて？」平時も思わず苦笑いをした。

「自分の殻って……優希…それって。」

「おかあさんがいったのよ。ほかに『2人ともそれぞれ良い所を持っていてお父さんとはまた違う素質がある』って。

ゆうきはへいじもかいともすきだからいまはまだえらべないわ。だからゆうきがおとなになるまで

ふたりともゆづきにふさわしいひとになってね。」

優希はニツコリ笑って二人にキスをした。

「なんや、黒羽とライバル関係になっけしもうたな。」

「そうだね。」快斗もふつと笑った。

15年後…優希は周りに盛大に祝福されお嫁に行った。

新一と志保のように幸せを掴んで……………そしてその幸せを分け与える為に……………。

第17話：幸せ…（後書き）

作「お疲れ様でした。『ただいま』完結いたしました。

これも皆様のお陰です。

蘭「優希ちゃん是谁と結婚したの？」

作「……………わかりません。でも快斗や平次だと年齢的に問題があるかと……………」

新「作者！！また快斗を覗き見させてたな？」

快「いいじゃん。今回は邪魔してないし♪」

平「文字数増やしの為やる？」

作「最後なんだから文句言わないでよ！」

志「最後の最後までうるさい後書ね……………」

？「……………あのゝ。お腹に入ってたんですけど……………名前とかないんでしょうか？しかも……………男？女？」

作「……………名前は『真央』男！！一姫二太郎って事で……………」

志「いい加減な作者ね。今に始まった事じゃないけど……………」

作「とにかく！！今までご愛読していただきありがとうございます………た。

また機会があれば参加していきたいと思えます。

宜しければ感想等頂けたら嬉しく思います。

一同「ありがとうございましたm（……………）m」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161a/>

『ただいま』

2010年10月8日14時15分発行